

# 東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要

— 1985年度 —

1986. 3

東大阪市教育委員会

# 東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要

— 1985年度 —

日下遺跡第13次発掘調査  
出雲井7号墳発掘調査  
桜井1号墳発掘調査  
船山遺跡第1次発掘調査  
神並遺跡第7次発掘調査

1986. 3

東大阪市教育委員会

## はしがき

東大阪市内には数多くの遺跡があり、私たちの祖先の足跡が地下に埋もれています。近年、遺跡内において鉄道・高速道路の建設および住宅建設など種々の上木・建築工事が増加しており、毎年300件を越える届出があります。その中には埋蔵文化財に影響を与える工事も多く、工事に先立つ発掘調査が増えていました。今回、国庫および府費の補助を受け、昭和60年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業として、日下遺跡・出雲井7号墳・桜井1号墳・船山遺跡・神並遺跡の5ヶ所の発掘調査を実施いたしました。

日下遺跡は貝塚遺跡としてよく知られており、今回、土塙墓・貝塚・住居跡を検出して縄文時代の生活および墓制を知るうえで貴重な知見を得ました。出雲井7号墳は6世紀中ごろの横穴式石室を作り古墳であり、石室内の調査で2~3時期の埋葬を確認し、桜井1号墳では横穴式石室内から組合式石棺を検出して古墳時代後期の葬制・墓制の貴重な資料を得ました。船山遺跡からは古墳時代後半から奈良・平安時代の遺物が多く出土し、神並遺跡からも奈良時代から室町時代にかけての遺構・遺物を検出して河内における古代から中世の生活を知るうえの資料を得ることができました。

調査の実施・報告書の作成にあたっては各方面の機関・人々から多大の御協力をいただき、関係各位にお礼を申しあげるとともに、本書が広く活用されることを心から願うものであります。

昭和61年3月

東大阪市教育委員会

教育長 木寺 宏

## 例　　言

1. 本書は東大阪市教育委員会が昭和60年度に国庫ならびに府費の補助を受け、発掘調査を実施した日下遺跡他計5遺跡の発掘調査報告書である。

2. 各遺跡の現場調査期間は次のとおりである。

日下遺跡第13次発掘調査……昭和60年4月22日～5月30日

出雲井7号墳発掘調査……昭和60年5月23日～7月24日

桜井1号墳発掘調査……昭和60年7月15日～7月20日

船山遺跡第1次発掘調査……昭和60年4月11日～4月25日

神並遺跡第7次発掘調査……昭和60年6月11日～7月18日

3. 調査関係者および調査担当者は次のとおりである。

社会教育部参事(文化財課長) 寺澤 勝

文化財課長代理 吉田 照博

同 課 主幹 奈良 英弘

同 課 主査 原田 修(桜井1号墳調査担当)

同 課 主任 下村 晴文

同 課 勝田 邦夫(神並遺跡調査担当)

同 課 上野 利明(出雲井7号墳調査担当)

同 課 吉村 博恵(日下遺跡調査担当)

同 課 阿部 翁治(船山遺跡調査担当)

同 課 成尾セツ子

4. 日下遺跡で出土した縄文時代人骨の現地指導・鑑定・保存処理・報告に関する一切は、大阪市立大学医学部解剖学第2講座 多賀谷昭氏に委託し、その報告を本書に掲載した。

5. 本書の作成はそれぞれ担当者があたり、出雲井7号墳の調査および報告の作成・執筆には(財)東大阪市文化財協会 中西克宏が協力した。船山遺跡の報告作成は原田が担当した。

6. 調査における上色・色調は、基本的に農林省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版 標準土色帖」により、記号の表示もそれに従った。

7. 報告書作成にあたっては多くの人々の御協力を得た。日下遺跡の獣骨については大阪市立大学医学部解剖学第2講座 安部みき子氏に教示を得、御好意により報告文を賜った。貝については梶山彦太郎氏、石器は(財)東大阪市文化財協会 松田順一郎に教示を得た。出雲井7号墳の出土人骨については多賀谷昭氏に教示を得た。

8. 調査にあたっては多くの方々の協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。

(順不同、敬称略)

井上正治、國貞幸雄(日下遺跡) 枚岡神社宮司 三条正基(出雲井7号墳) 磯山博美(桜井1号墳) 木村順治(船山遺跡) 高田和夫(神並遺跡)

# 目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 日下遺跡第13次発掘調査	3
1. 遺跡の概要	(吉村) 3
2. 層位	(〃) 4
3. 造構	(〃) 5
4. 遺物	(〃) 10
5. 人骨	(多賀谷) 15
6. 動物遺体	(安部) 19
7. まとめ	(吉村) 21
第3章 出雲井7号墳発掘調査	23
1. 出雲井古墳群の概要	(上野) 23
2. 墳丘	(〃) 24
3. 石室	(〃) 26
4. 石室内遺物出土状況	(〃) 29
5. 遺物	(中西) 31
6. まとめ	(上野・中西) 38
第4章 桜井1号墳発掘調査	39
1. 古墳の位置と調査の経過	39
2. 調査の概要	40
3. 遺物	43
4. まとめ	44
第5章 船山遺跡第1次発掘調査	(原田) 46
1. 遺跡の概要	46
2. 層位	46
3. 造構	48
4. 遺物	48
第6章 神並遺跡第7次発掘調査	(勝田) 51
1. 遺跡の概要	51
2. 層位	52
3. 造構	53
4. 遺物	58
5. まとめ	60

## 図版目次

- 図版1 日下遺跡第13次調査遺構 1. 第9・10層上面検出遺構（東より）  
2. 第9・10層上面検出遺構（南より）
- 図版2 日下遺跡第13次調査遺構 1. 上塙墓XII  
2. 上塙墓XIII
- 図版3 日下遺跡第13次調査遺構 1. 土塙墓XIII  
2. 土塙墓XIV
- 図版4 日下遺跡第13次調査遺構 1. 上塙墓XV・貝塚II  
2. 上塙墓XVI
- 図版5 日下遺跡第13次調査遺構 1. 土塙35（大埋葬）  
2. 貝塚I
- 図版6 日下遺跡第13次調査遺構 1. 住居跡（南より）  
2. 方形石組炉（東より）
- 図版7 日下遺跡第13次調査遺物 1. 繩文土器（後期）
- 図版8 日下遺跡第13次調査遺物 1. 繩文土器（晩期）  
2. 石器
- 図版9 日下遺跡第13次調査遺物 1. 獣骨（シカ）  
2. 獣骨（イノシシ・クジラ）
- 図版10 日下遺跡第13次調査遺物 1. 獣骨  
2. 貝
- 図版11 出雲井7号墳調査遺構 1. 調査前の状況  
2. 石室全景
- 図版12 出雲井7号墳調査遺構 1. 石室全景  
2. 石室左側壁
- 図版13 出雲井7号墳調査遺構 1. 石室右側壁・棺台  
2. 石室床面遺物出土状況
- 図版14 出雲井7号墳調査遺構 1. 石室床面遺物出土状況（第1群）  
2. 石室床面遺物出土状況（第2・3群）
- 図版15 出雲井7号墳調査遺構 1. 石室床面遺物出土状況（第4群）  
2. 石室再利用時遺物出土状況
- 図版16 出雲井7号墳調査遺物
- 図版17 出雲井7号墳調査遺物
- 図版18 出雲井7号墳調査遺物
- 図版19 出雲井7号墳調査遺物
- 図版20 出雲井7号墳調査遺物
- 図版21 桜井1号墳調査遺構 1. 古墳全景（南より）  
2. 古墳全景（東より）
- 図版22 桜井1号墳調査遺構 1. 石室内の組合式石棺蓋遺存状況  
2. 組合式石棺奥半部組合状況
- 図版23 桜井1号墳調査遺構 1. 石棺南端部須恵器出土状況  
2. 石棺下の棺台の状況
- 図版24 桜井1号墳調査遺構・遺物 1. 石棺下における鉄製品出土状況  
2. 出土遺物

図版25 船山遺跡第1次調査遺構	1. 調査地全景（東より） 2. 第6層上面遺物出土状況
図版26 船山遺跡第1次調査遺構	1. 土師器出土状況 2. 溝検出状況
図版27 船山遺跡第1次調査遺構	1. 溝1の検出状況 2. 調査地の層序
図版28 船山遺跡第1次調査遺物	1. 弦生土器・須恵器 2. 上師器（婆） 3. 瓦器椀・土師器片 4. 瓦器碗
図版29 神並遺跡第7次調査遺構	1. 第6層上面検出遺構（東） 2. 第6層上面検出遺構（西） 3. 第7層上面検出遺構（東） 4. 第7層上面検出遺構
図版30 神並遺跡第7次調査遺構	1. 井戸1 2. 第8層上面検出遺構（西） 3. 第8層上面検出遺構（東）
図版31 神並遺跡第7次調査遺構・遺物	1. 溝21遺物出土状況 2. 土坑9貨銭出土状況 3. 土坑9出土貨銭
図版32 神並遺跡第7次調査遺物	1. 溝1・2・4・6・12・16、土塙3・8出土の遺物 2. 溝21出土遺物

## 挿図目次

第1図 遺跡周辺図	2
第2図 調査位置図	3
第3図 第9・10層上面検出遺構平面実測図	4
第4図 西壁断面実測図	5
第5図 土塙墓XI・XII実測図	6
第6図 十塙墓XIV・XIII実測図	7
第7図 土塙墓XV・XVI、土塙35（大理石）実測図	9
第8図 方形石組炉平面実測図	10
第9図 純文後期土器拓影・実測図	11
第10図 純文土器実測図	12
第11図 純文晩期土器拓影	13
第12図 石器実測図	14
第13図 第11・13次調査縄文時代土塙墓群図	22
第14図 出井古墳群分布図(1/5000)	23
第15図 墳丘実測図(1/200)	24
第16図 墳丘断面図(1/40)	24
第17図 石室上面図(1/40)	27
第18図 石室実測図(1/40)	28

第19図	石室再利用時の遺物出土状況 (1/20) .....	29
第20図	石室再利用時出土遺物実測図(1/20) .....	30
第21図	床面出土土器.....	32
第22図	床面出土土器.....	34
第23図	床面出土鐵製品.....	35
第24図	大刀実割図.....	35
第25図	床面出土蓑身具.....	37
第26図	石室再利用時の遺物.....	37
第27図	桜井 1 号墳の位置と周辺の遺跡.....	39
第28図	石室及び組合式石棺実測図 (1/30) .....	40
第29図	石室と石棺検出状況.....	42
第30図	須恵器・鉄製品(1/2) .....	43
第31図	埴輪拓影(1/4) .....	43
第32図	組合式石棺.....	44
第33図	船山遺跡と調査地点.....	46
第34図	遺構平面図及び層断面図.....	47
第35図	縄文土器片(1/2) .....	48
第36図	弥生土器・須恵器・土師器片(1/4) .....	49
第37図	瓦器及び土師質土器.....	50
第38図	瓦拓影.....	50
第39図	調査地点位置図 (1/5000) .....	51
第40図	調査地西壁（上）と南壁（下）の層位.....	53
第41図	構 1 東壁層位.....	53
第42図	第 6 層上面の遺構.....	54
第43図	第 7 層上面の遺構.....	55
第44図	第 8 層上面の遺構.....	57
第45図	出土遺物実測図.....	59

## 表 目 次

第 1 表	頭蓋骨計測値.....	18
第 2 表	四肢骨計測値・示数.....	18
第 3 表	動物遺体の出現表.....	20
第 4 表	シカ・イノシシの出現頻度と最少個体数.....	21
第 5 表	玉類一覧表.....	36
第 6 表	石棺一覧表.....	45

## 第1章 調査に至る経過

東大阪市は大阪府のはば中央部に位置し、東部は生駒山地に接し、西麓にはいくつかの扇状地が広がりゆるやかに傾斜をなしている。西は平野部で平坦地が広がっている。西部地域は約5000年前までは海—河内湾—であった。そのち河内潟となり、弥生時代以降、山賀遺跡・瓜生堂遺跡などが形成されるようになり、以後、西岩田遺跡・若江遺跡など各地で古墳時代から近世に亘り集落を営んでいた。それに対し東部は旧石器時代以降現在に至るまでほとんど絶えることなく生活が営まれており、数多くの遺跡が点在している。旧石器時代の遺跡としては山畠・坊主山などがあり、石器（ナイフブレイドなど）が出土している。縄文時代になると遺跡も増え、早期の押型文土器が出土した神並遺跡をはじめ、飼手・馬場川・鬼塚・日下などとくに後期以降の遺跡が数多く存在する。弥生時代になると中心は西に移り、扇状地の縁辺地域に位置する西ノ辻・鬼虎川などで集落が営まれていた。古墳時代、とくに後期には山麓地域一帯に数多くの古墳が営まれ、出雲井古墳群・山畠古墳群・桜井1号墳などが築造されている。また古墳時代以降、船山・神並をはじめ中世から近世に亘る遺跡も数多くある。近年、東大阪市内では鉄道・高速道路建設に伴う長期の発掘調査を実施していると同時に、住宅建設・整備事業などに伴う調査も數多く行っている。

1. 日下遺跡 本遺跡は縄文時代後期から晩期にかけての遺跡として古くからよく知られている。近年この地域にも建築の波が押し寄せ、住宅が建ち並んでいる。今回の調査地—日下町7丁目769-1—も住宅建設計画に伴うものであり、昭和59年度の第11次調査において土塙墓10基、甕棺墓3基、縄文時代後・晩期の土器、石器を検出した第1トレンチの北側にあたり、昭和60年4月22日から5月30日まで発掘調査を実施した。

2. 出雲井7号墳 本墳は枚岡神社境内に残る古墳として古くより周知されている。しかしながら、その規模、内部主体等は未調査のため不明であった。今回、枚岡神社駐車場の設置が本墳を含む範囲で計画されたため、周辺をも含めて試掘調査を実施した。その結果、本墳では、ガラス製小玉、器台を確認した。他に古墳、構造は確認できなかった。このため、本墳を保存する方向で協議を実施し、合わせて整備のため昭和60年5月23日から7月24日まで発掘調査を実施した。

3. 桜井1号墳 昭和60年6月中旬、生駒山西麓に位置する東大阪市六万寺町1丁目956番地の磯山博美氏宅の庭より古墳らしいものを発見した旨、文化財課へ連絡を受けた。急撫現場で確認したところ、破壊された横穴式石室内に天井石で押しつぶされた状態の組合式石棺が遺存していた。とりあえず現状の維持をお願いし、7月15日から20日までの間、敷地内の石室奥半部について調査を実施した。

4. 船山遺跡 昭和60年1月末、桜井古墳の西方に位置し、式内社梶無神社のすぐ南側にある六万寺町3丁目629-4番地において個人住宅建築の旨の届出があった。届出者の協力のもとに試掘調査を行った結果、住宅の基礎が下部に統く遺物包含層に影響すると判断したため

発掘調査の必要性を申入れ、心よく承諾を受け、4月11日から25日まで調査を実施した。

6. 神並遺跡 昭和60年5月、東石切町1丁目715番の1において住宅建設の届出があった。当該地は本遺跡の北端に位置し、また法通寺跡にも近いことから試掘調査を実施した。その結果、第2～4層で平安末～鎌倉時代の瓦器梶・上師器皿・羽釜、第5層からは須恵器・土師器炭化物、第6層上面でピットを検出し、奈良時代から鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。そのため届出者と協議を行い、建設工事による基礎掘削約90cmについて、昭和60年6月11日から7月18日まで発掘調査を実施した。



第1図 遺跡周辺図

## 第2章 日下遺跡第13次発掘調査

### 1. 遺跡の概要

日下遺跡は生駒山地の西に広がる一扇状地の末端部に位置し、東は急傾斜で山麓に接し、西はなだらかに傾斜して平野部に続いている。南北とも谷筋で画され、南は西流する日下川があり、北の谷は塞き止められて近年まで日下大池が存在していた（現在は埋め立てられて、孔倉街東小学校）。本遺跡は現在の日下町2丁目から7丁目にわたる地域にあり、「貝塚」などの字名が示すように、山畑から多量の貝が出土することで知られていた。大正14年に「貝塚」であることが確認されて以来、多くの研究者、機関によって調査されてきており、昭和47年には遺跡南側の一部が「日下貝塚」として国の史跡指定を受けている。貝塚は19種におよぶ淡水産・海水産の貝で形成されているが、大半はセタシジミであり、他にオオタニシ・チリメンカワニナ・マガキ・ハマグリなどが出土している。縄文時代の埋葬人骨はこれまで遺跡南部で11体確認され、北部でも14体出土しており、昨年の調査では土塙墓6基が円形にならぶ環状列墓や甕棺墓3基を検出した。昭和41年の調査（帝塚山大学）においては古墳時代の埋葬馬が出土している。遺物としては貝、獸骨のほか中期から晩期にわたる縄文土器、石鐵・石匕・石棒などの石器、土偶、須恵器、製塙土器、韓式系上器などが出土している。



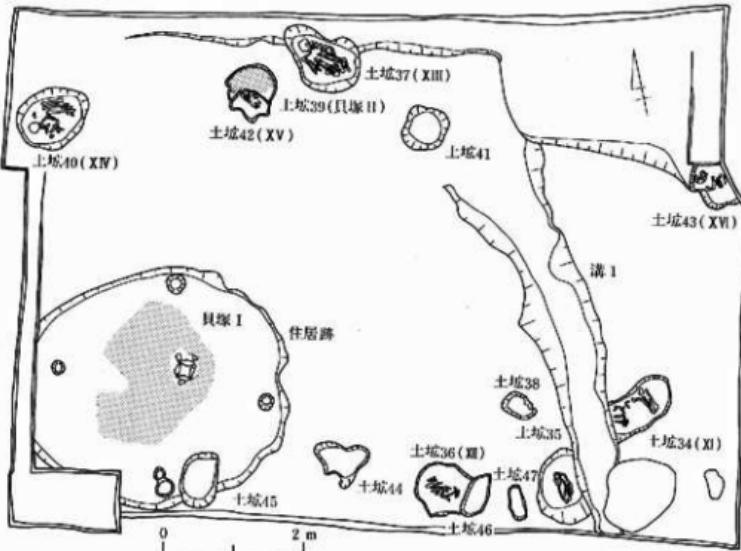
第2図 調査位置図

## 2. 居住

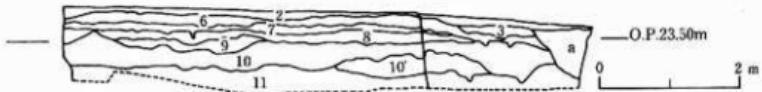
今回の調査地は昭和59年度・日下遺跡第11次調査の第1トレンチと第2トレンチの間、約80m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。層位は第11次調査と合わせた。

- |      |                      |   |
|------|----------------------|---|
| 第2層  | にぶい黄褐色砂質土 (10Y R4/3) | 表土。                                     |
| 第3層  | 暗赤褐色土 (2.5Y R3/3)    | 小石・粗粒砂含む。                               |
| 第6層  | 明黄褐色砂質土 (10Y R7/6)   | 中粒砂含む。磁器・縄文土器・サヌカイト出土。<br>近世・近代遺構面。     |
| 第7層  | 灰褐色砂質土 (5 Y R5/2)    | 磁器・陶器・須恵器・土師器・縄文土器出土。                   |
| 第8層  | 明赤褐色土 (2.5Y R5/2)    | 瓦器・土師器・縄文土器・サヌカイト出土。<br>中世の擾乱層。         |
| 第9層  | 黒褐色土 (10Y R3/2)      | 粗・中粒砂含む。                                |
| 第10層 | 暗褐色土 (10Y R3/4)      | 縄文土器・サヌカイト出土。<br>疎・粗粒砂を多く含む。(第10層は疎が多い) |
|      |                      | 第9・10層上面。 縄文時代遺構面。                      |
| 第11層 | 黒褐色砂礫土 (10Y R2/3)    |   |
| 上塙 a | 黒褐色土 (10Y R3/2)      | 現代の土塙。                                  |

調査地の北側は旧の日下人池を埋め立てられているが、調査地との間に約1.5mの高低差があ



### 第3回 造構平面図



第4図 西壁断面実測図

り、調査範囲内でも北側が第5層より傾斜していた。第3層は近代以降の傾斜部埋土であるが、多量の貝（セタシジミ・ハマグリ）とともに縄文土器片・サヌカイト片が出土しており、近くに存在した貝塚を掘り上げたものと考えられる。第6層は近世の整地層であり、上面において2基の上塙を検出した。第8層は13世紀代の擾乱層と考えられ瓦器楕片とともに、後期から晩期の縄文土器片、石鏡などの石器、サヌカイト片、須恵器、上師器片、動物遺体などが多く出土した。第9層には縄文土器片、サヌカイト片が含まれており、第9・10層上面で古墳時代の溝・縄文時代の貝塚・土塙などを検出した。

### 3. 造構

第6層上面および第9・10層上面でそれぞれ造構を検出した。第6層上面では径1.5m、深さ0.4m、0.3m×0.1m、深さ0.2mの2基の近代土塙を検出した。第9・10層上面では古墳時代の溝1条と縄文時代の土塙墓6基・上塙6基・貝塚2基と方形石組が伴う住居跡を検出した。以下、主要造構について概要を述べ、土塙墓内の埋葬人骨の詳細については5、人骨に委ねる。

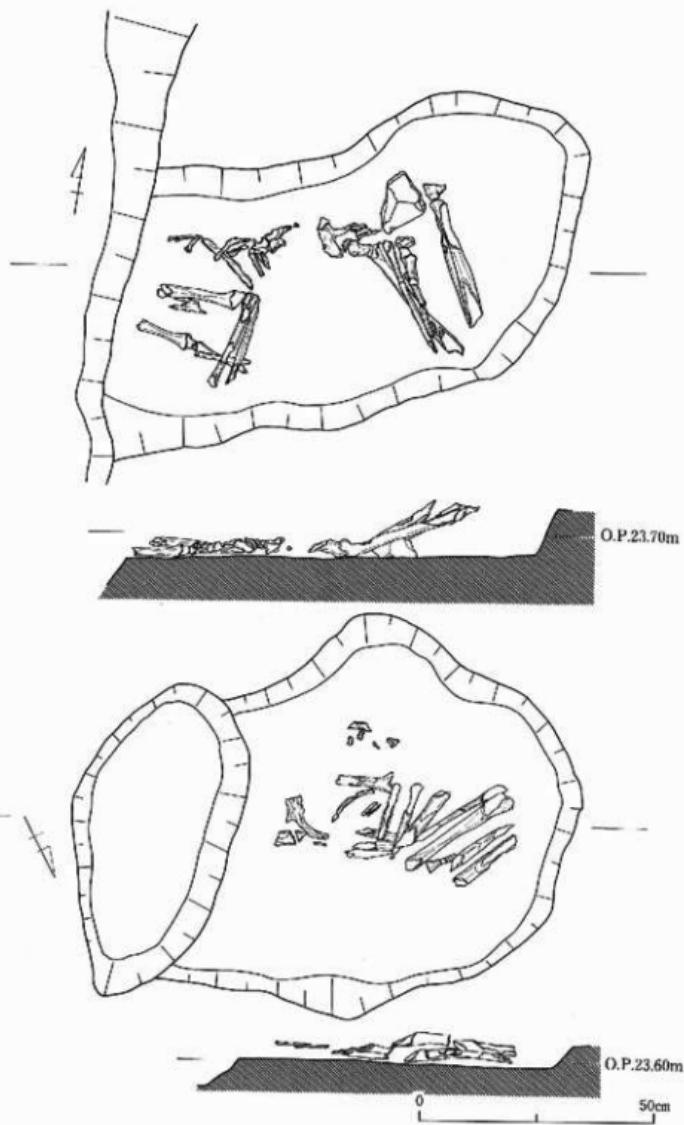
溝1は南から拡幅しながら北へ延びており、旧谷筋に注いでいたと考えられる。幅は南で0.2m、北で2.0m、深さ0.05~0.4m。溝内からは須恵器片とともに縄文土器・サヌカイト・獸骨の小片が出土した。

#### 土塙墓II-土塙34-（第5図 図版2）

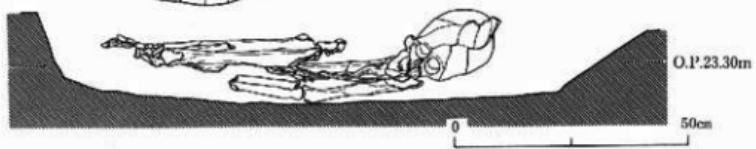
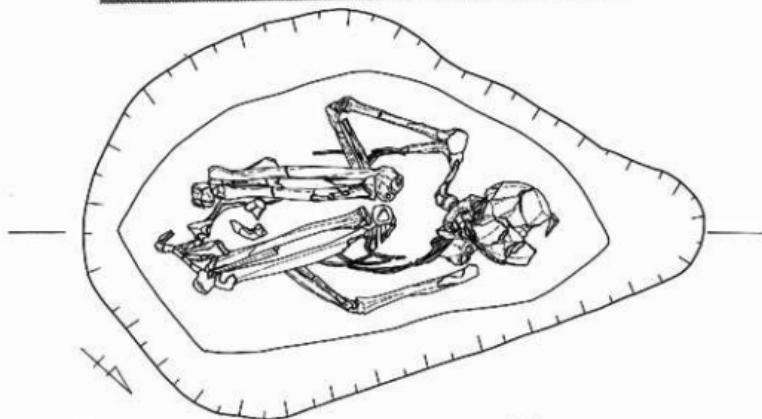
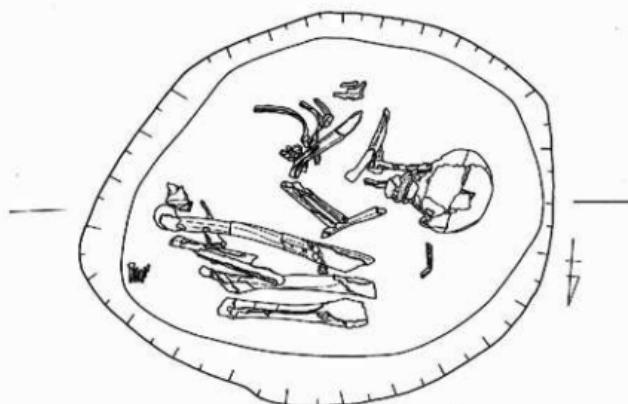
上塙の一部は溝1によって削り取られていた。そのため埋葬人骨の頭蓋骨など上半身の一部が欠損していた。上塙は西南西-東北東を長軸とする0.95m（残存部）×0.72m、深さ0.1mのやや不整の長楕円形を呈し、頭位を西南西にしていたと考えられる横臥屈位の成人の男性が埋葬されていた。人骨の残存状態はあまりよくなく、左右の上腕骨・橈骨・尺骨・肩甲骨・肋骨、脊椎骨のそれぞれ一部、左右大腿骨・胫骨、左腓骨と左右の足骨の一部を検出した。埋葬は胴体の左脇（側面）を上にし、長軸に沿ってほぼ水平に横たえていた。右腕は胴体からやや開きぎみで東南東にまっすぐに延ばし、左腕は上腕を胴体に沿わせ、肘をほぼ直角に折り曲げて右腕の上に重ねていた。脚は左右とも股関節をゆるやかに曲げ胴体から下前方に延ばし、膝を強く折り曲げていた。大腿骨と胴体のなす角度は左で約120°、右で約110°であった。

#### 土塙墓III-土塙36-（第5図 図版2）

上塙の一部は土塙46によって削り取られており、埋葬人骨の頭蓋骨をはじめ上半身の一部が欠損していた。上塙は東南-西北を長軸とする0.73m（残存部）×0.85m、深さ0.08mの楕円形を呈し、頭位を東南東にしていたと考えられる仰臥屈位の成人の女性が埋葬されていた。人骨の残存状態は良くなく、左右の上腕骨・橈骨・尺骨・右肩甲骨・肋骨の一部、左右の大腿骨・



第5圖 土坡墓Ⅲ・Ⅳ実測図



第6図 上塙墓 XIV・XIII実測図

脛骨・腓骨を検出した。埋葬は胴体を仰向けにしてほぼ水平に横たえ、右腕は上腕を胴体に沿わせて肘を強く折り曲げていた。左腕は上腕を胴体の上に乗せ、肘をほぼ直角に曲げて右腕に重ねていた。脚は両脚とも股関節・膝を強く折り曲げて右方向に置いていた。

#### 土塙墓 XIII - 土塙37 - (第6図 図版3)

土塙の北側は谷筋の傾斜部にあたり、一部削られていた。土塙は西北-東南を長軸とする $1.12\text{m} \times 0.85\text{m}$ 、深さ $0.2\text{m}$ の卵形を呈し、頭位を西北にした仰臥屈位の熟年の女性が埋葬されていた。人骨の残存状態は良く、頭蓋骨・下頬骨をはじめ、左右の鎖骨・肩甲骨・肋骨と脊椎骨の一部、左右の上腕骨・橈骨・尺骨・右手骨の一部、骨盤、左右の大腿骨・脛骨・膝蓋骨・足骨を検出した。埋葬は胴体を仰向けにしてほぼ水平に横たえ、顔面を東北方向に傾けていた。右腕はやや外に開きぎみにして胴体に沿わせ、肘を約 $50^\circ$ に折り曲げて身体の上に乗せていた。左腕は胴体に沿わせ肘をゆるやかに内側に曲げていた。脚は両脚とも股関節・膝を強く折り曲げて胸の上部でそろえていた。

#### 土塙墓 XIV - 土塙40 - (第6図 図版3)

土塙は西南西-東北東を長軸とする $1.02\text{m} \times 0.83\text{m}$ 、深さ $0.17\text{m}$ の楕円形を呈し、頭位を西にした横臥屈位の熟年男性が埋葬されていた。人骨は頭蓋骨・下頬骨・左右鎖骨・肩甲骨の一部、左右上腕骨・右橈骨・尺骨・脊椎骨・肋骨・骨盤の一部、左右大腿骨・脛骨・右腓骨・足骨の一部を検出した。埋葬は顔面を北に向かって、胴体は右脇(側面)を上にし、ほぼ土塙長軸に沿って水平に横たえていた。右腕は上腕を胴体に沿わせ肘をほぼ直角に折り曲げ、左腕も上腕を胴体に沿わせていた。脚は右脚を上にし、両脚とも股関節・膝を強く折り曲げて胴体の前方に置いていた。両大腿骨と胴体のなす角度は約 $55^\circ$ であった。

#### 土塙墓 XV - 土塙42 - (第7図 図版4)

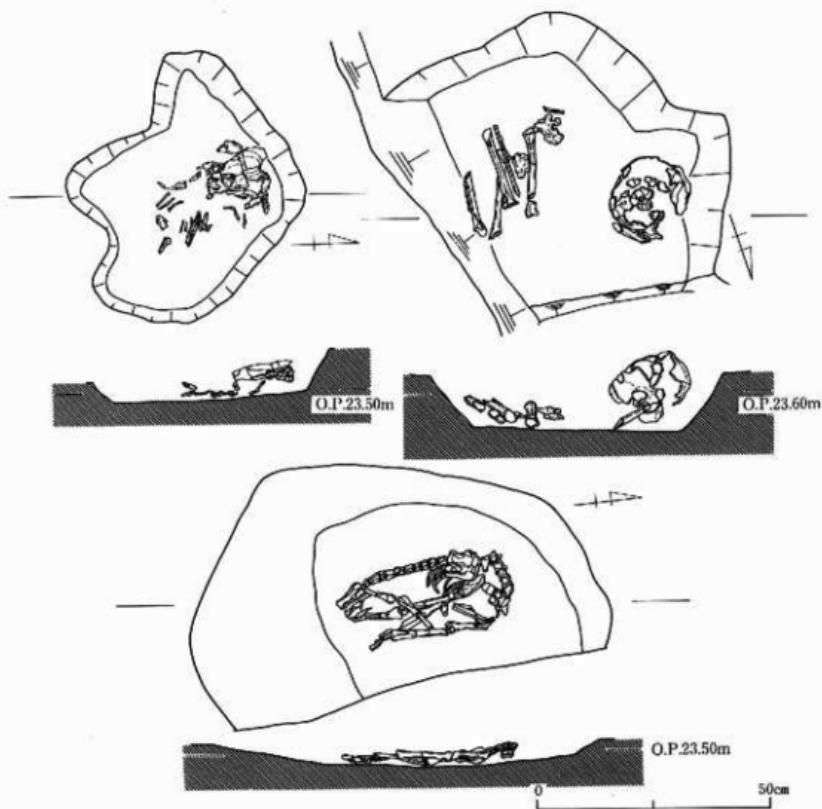
土塙は貝塚IIの一部を削り、 $0.58\text{m} \times 0.51\text{m}$ 、深さ $0.1\text{m}$ の不定形なもので、頭位を北北西にした横臥屈位の1~2才ごろの幼児が埋葬されていた。人骨の残存状態はそれほど良くなく、頭蓋骨は上圧などによりひしゃげて壊れていた。他に下頬骨・肋骨・骨盤の一部、腕・脚の骨の一部を検出した。埋葬は左脇(側面)を下にして、顔面を東北東に向かって、両腕は左右とも胸部前方で肘を強く折り曲げていた。脚はほとんど残存しないため不明確であるが、胴部前方で股関節・膝をそれぞれほぼ直角に曲げていたと考えられる。

#### 土塙墓 XVI - 土塙43 - (第7図 図版4)

土塙は調査地の東端に位置するためその形態は不明である。検出部分は $0.65\text{m} \times 0.65\text{m}$ 、深さ $0.12\text{m}$ を測り、頭位を西北西にした横臥屈位の3才前後の幼児が埋葬されていた。人骨は頭蓋骨・下頬骨・骨盤・左右大腿骨・脛骨・腓骨を検出した。埋葬は顔面を東北方向に向けて傾け、脚は右脚を上にして左右とも胴体の前方で股関節をほぼ直角に曲げ、さらに両膝を強く折り曲げていた。

#### 土塙35 (第7図 図版5)

土塙の東側の一部は溝1によって削られていた。土塙は $1.05\text{m} \times 0.64\text{m}$ (残存部)、深さ $0.12$

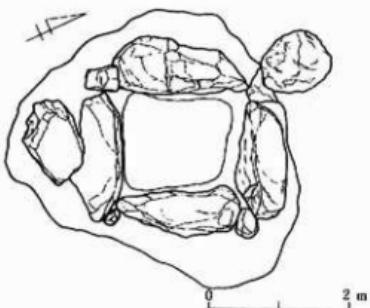


第7図 上塙墓 XV・XVI、上塙35(犬埋葬)実測図

mの卵形を呈し、犬が埋葬されていた。骨の残存状態は良好で、頭蓋骨、各椎骨、左右肩甲骨、胸骨、左右上腕骨・桡骨・尺骨、右手根骨・中手骨の一部、寛骨、左右大腿骨・胫骨・腓骨を検出した。埋葬は左側面を下にし、頸を強く折り曲げて胴体の上に乗せていた。前足は左右とも肩関節を強く曲げ腹部前方にはまっすぐに延ばして交叉させ、後足も股関節を強く折り曲げ腹部前方で交叉させ前足の上に乗せており、身体全体をまるめていたと考えられる。

土塙は他に 6 基検出したが、その性格はほとんど不明である。土塙41からは土器片(?)が多く出土し、土塙39からは多量の貝と土器片(1・10)を検出した。土塙46には犬骨の小片があったが他の土塙からはほとんど遺物は出土しなかった。

貝塚 I (図版 5)



第8図 方形石組炉平面実測図

スッポン、カエル、ヘビ、コイ・フナ・サワラ・マダイなどを検出した。貝塚内には縁帶文土器などの後期の土器片も含まれていたが、晩期（滋賀里Ⅰ）の土器が多く出土した。

#### 貝塚II - 土塙39- (図版3)

貝塚は径0.7mの円形土塙に多量の貝などを捨てたものである。南側の一部は上塙42によつて削られていた。貝はセタシジミが大半でマツカサガイ・イシガイ・ナガタニシ・クロダカワニナ（淡水産）とハマグリ・マカキ・サルボウ系の貝（海水産）、ツムガタギセル（陸産）があつた。獣骨はイノシシ・シカ・マダイなどの魚類、カエル、ヘビなどを検出したが個体数は少ない。貝塚内からは他に後期初頭の土器片（1・10）とサヌカイト片が出土した。

#### 住居跡（第3・8図 図版6）

貝塚Iを取り除いた下より方形石組炉を伴う住居跡を検出した。長径3.7m、短径3.2mの不整円形を呈する小型住居で、後世の削平などにより縁辺部の立ち上がりは東側で12~14cm、西・北側で5~7cmと低い。床面中央部に内辺14~17cmの方形石組炉があり、それを囲んで4方向に5柱穴を検出した。石組かは0.4cm×0.41cm、深さ0.25cmのピットに上面17~20cm、幅8~6cmの花崗岩4個を方形に組み、4隅に3~5cmの石を詰めていた。埋土内には炭・貝片が少量含まれており、床面直上において後期末の縁帶文土器片（11）を検出した。

#### 4. 遺物

出土遺物としては後期・晩期の縁帶文土器、石鏃・削器などの石器、サヌカイト片、須恵器・上師器・瓦器・陶器・磁器などの小片、獣骨・貝などの動物遺体があつた。以下、縁帶文時代の主要遺物について記し、獣骨については6、動物遺体に委ねる。

#### 縁帶文土器（第9・10・11図 図版7・8）

今回出土した縁帶文土器は後期から晩期中葉に亘るものである。第2層から第9層までほとんどの層で検出したが、特に第7・8層からより多く出土した。後期では縁帶文土器が多く、晩期では滋賀里Ⅰ・Ⅱ型式のものが主流で、Ⅲb型式のものまで確認した。

後期I - 中津式相当 -

貝塚は住居跡の窪地を利用して約3mに多量の貝と獸骨類、縁帶文土器、石器、サヌカイト片などで形成されていた。貝は大半がセタシジミであり、他にナガタニシ・イシガイ・マツカサガイ（淡水産）とアカニシ・マガキ・サルボウ系の貝（海水産）があつた。また陸産のナミマイマイも出土しているが、これは食用ではなく貝塚の残渣物を求めて入り込んだものと考えられる。獣骨としてはイノシシ・シカが多く、他にハタネズミ・リス科の動物、コウサギ、



1-10(貝塚II)、2・8(貝塚I)、3・4・6・9(第8層)、5(溝1)、7(土塁41)、11(住居跡)

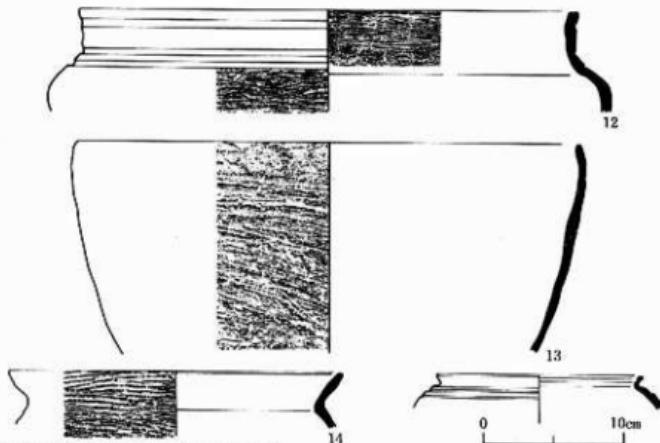
第9圖 縄文後期土器拓影・実測図

深鉢 1は太い直線・曲線の沈線で文様を描き、その区画内に縄文を残した消磨縄文土器。10は粗製無文深鉢の底部であり、平底を呈し体部は巻貝による横方向の調整を施している。

浅鉢 2はやや肥厚した口縁部に端部から上部にかけて沈線で区画した帯状の消磨縄文土器。

後期II—北白川上層I式相当—

深鉢 3は低い波状口縁土器で、口縁部に深い一条の沈線があり、その端部に棒状刺突文がある。波状部に深い刺突文と3本の短い横沈線がある。体部は縄文を地文とし、5~6条の垂下



12(第8層)、13(土壌45)、14・15(土壌35)

第10図 繩文晩期土器実測図

沈線文が施されている。8は口縁部を肥厚させて縄文を施し、頸部から縦方向に数条の垂下条線文がある。6は逆く字形に内傾する幅広い口縁部をなす。口縁部に縄文を施し、中央凸帯と肩部に刻目があり、凸帯左右に渦巻文と逆C字の連弧文を配している。7は局部的に縄文が残り、間隔をあけて縦方向に6~7条の沈線があり、その間に蛇行した縦方向の沈線が施されている。5は地文に縄文があり、縦方向に4本の太い沈線を一定間隔をあけて施している。4は頸部の一部であり、5本をまとまりとする垂下条線を施している。

#### 後期III-北白川上層II式相当-

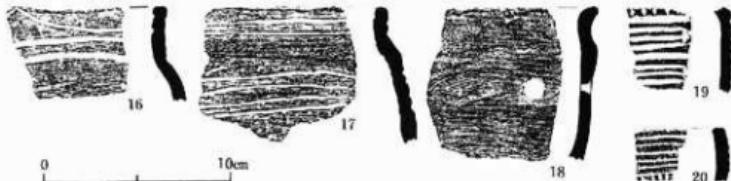
深鉢 9は口縁直下に8字状の貼付文を付し、その左右に刻目凸帯がありその下に沈線で画された縄文帶がある。堀之内II式併行。

#### 後期IV-宮漣式相当-

深鉢 11は口縁を強くナデて胴部との間に段を有し、口縁の上・下部に2条の沈線があり、下部沈線に巻貝による扇状押捺文を施している。口縁部に焼成後外面から穿った0.5cmの孔がある。

#### 晩期I-滋賀單I式相当-

深鉢 12は口縁を強くヨコナデし、体部との間に段を有す。口縁部には3条の沈線があり、端部を四角くおさめている。体部外面は巻貝による調整、内面は口縁近くに巻貝調整が少し見られるが全面ヨコナデを施している。17も口縁を強くナデして体部との間に低い段を有し、口縁部には2条の沈線を施し端部を四角くおさめている。体部の上段は巻貝調整のちナデしており、4条の沈線を施している。16は波状口縁の深鉢の一部であり、口縁部はナデ調整をして、波状にあわせて1条の山形沈線と2条の平行沈線を施している。体部外面は巻貝調整、内面はヨコナデ調整している。



第11図 楊文晩期土器拓影(第8層出土)

晩期II-滋賀里II式相当-

深鉢 18は口縁部を強くナデて体部との間に少し段を有し、口縁端部を四角くおさめている。体部外面は巻貝調整、内面はヨコナデ調整をしている。体部上段に焼成後外面から穿った0.5cmの孔がある。

浅鉢 19は肩部を大きく張り出した黒色磨研の浅鉢肩部の一部。文様は肩上部の一条のやや太い沈線と肩最大径部の刻目帯で画した中に2本の平行沈線を入れ、その間に3本を一単位とする沈線文様が2段あり、その結束部に棒状刺空文を配す。

椀 20は口縁部をやや内弯させ、端部は四角くおさめている。口縁上部から6条の平行沈線があり、その下に刻目帯を配している。

晩期III-滋賀里III式相当-

深鉢 13は体部と口縁部の区別がなく、口縁端部はやや内弯して丸くおさめている。外面口縁部は横方向(右→左)の巻貝調整、体部はやや上がりの縦方向のケズリ調整をしている。内面は口縁部を横方向のケズリ調整、体部をヨコナデ調整している。14は短く外反する口縁部をもち、頸部に一条の強いナデを施している。口縁部外面は二枚貝調整、体部は一枚貝調整のちナデしている。内面は丁寧にヨコナデ調整している。

浅鉢 15は黒色磨研の浅鉢で、口縁部は短く外反し、端部を四角くおさめ段をなしている。体部は張り出し、肩部直下に2本の沈線を有す。内外面とも丁寧に磨いている。

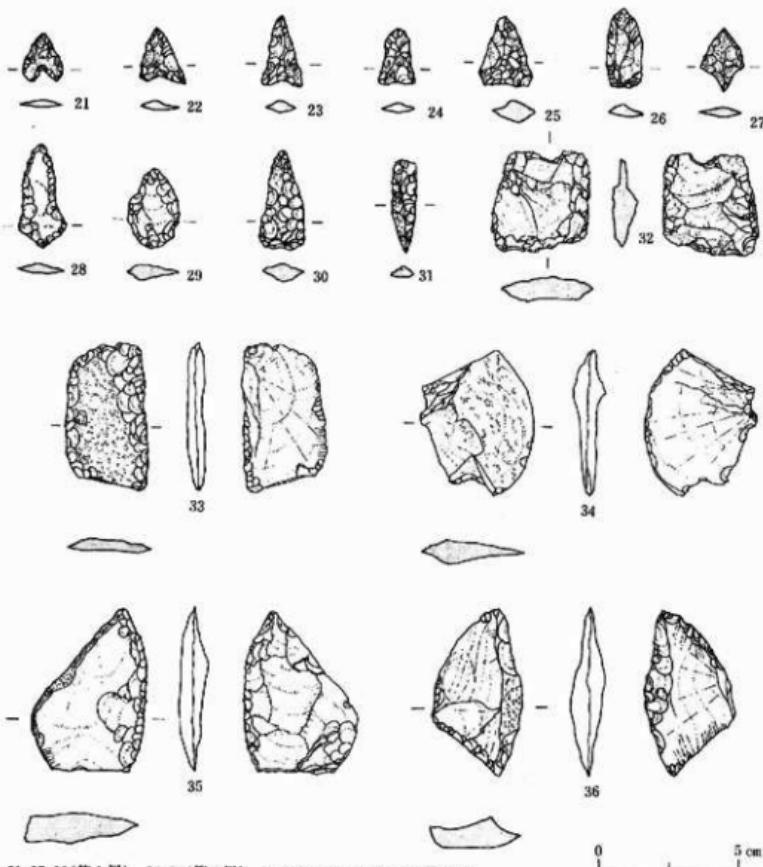
石器(第12図 図版8)

石器としては石鋤・石錐・楔形石器・横形削器をはじめ、一部分だけに加工痕のあるもののがいくつか見られる。その他サヌカイトの石核・剥片は多く出土している。

石鋤(21~30) 石鋤は24個検出した。有茎のもの2、基底部に抉りのある凹基無茎11、基底部をほぼまっすぐにして三角形を呈する平基無茎7、基底部を丸くおさめた円基無茎1、不明3に大別することができるが、個々によってその形態はかなり異なる。石錐はほとんど両面から連続細部調整している。

石錐(31) 断面三角形を呈し、先端部および両縁辺を連続細部調整しており、先端部近辺は2方向から調整している。

楔形石器(32) 数種の楔形石器が出土しているが、器形・大きさはそれぞれ異なる。32の平面形は正方形に近く、相反する2縁辺は非連続の細部調整を施しており、1縁辺は使用痕と



21-27-30(第1層)、24-34(第6層)、25-26-29-31-33-35-36(第8層)  
22(貝塚1)、23-28(土塙35)、32(住居跡)

第12図 石器実測図

思われる剥離と潰れが見られる。

前器(33~36) 器形・大きさは各個体によって異なる。34・35は1縁辺だけを細部調整したもので、片面は連続調整しているがもう一面は非連続調整している。33は不整の長方形を呈し、その両長縁辺を両面とも連続細部調整している。36の平面形は不整の三角形を呈し、その3縁辺の一部を除き、それぞれ片面を連続細部調整している。

以上主要遺物について記したが、これ以外にも上器をはじめ多数の遺物が出土している。土器には縄文時代早期の押型文土器の小片が2点あった。

## 5. 人骨

縄文時代晩期の6基の土塙墓（土塙墓XI～XVI）から、各1体、合計6体の人骨が出土している。これらのうち、土塙墓XV、XVI人骨は小児のものであり、他の4体は成人で、男性と判定されたもの2体、女性と判定されたもの2体からなる。土塙墓XIII人骨はほぼ全身の骨が残存し、XIV人骨も比較的多くの部位が残っているが、それ以外の人骨の残存部位は多くない。

### 土塙墓VI人骨

#### ●保存状態

頭蓋は無く、体幹では上位腰椎の破片と右の肋骨の破片が存在する。上肢では、左は上腕骨の三角筋粗面を含む骨体の遠位2/3と滑車、尺骨骨体、橈骨骨体の橈骨粗面付近が残り、右は上腕骨骨体遠位1/3、尺骨骨体近位2/3と滑車切痕付近、橈骨骨体近位1/2が残り、下肢では、右寛骨の大坐骨切痕付近、右の大脛骨近位3/4、胫骨骨体の大部分と下関節面、腓骨骨体の大部分、左の胫骨骨体遠位1/3と左右の距骨が存在するが、右上腕骨と胫骨の表面は風化が著しい。

#### ●人骨の特徴

上腕骨は頑丈で三角筋粗面がよく発達している。大腿骨の粗線も比較的よく発達し、胫骨も扁平性を示すが、腓骨は細い。

#### ●年令と性別

骨の大きさや表面の状態から成人と推定される。性別は、筋付着部の発達や骨の頑丈さから男性と判定した。

### 土塙墓III人骨

#### ●保存状態

保存状態は悪く、同定できた部位は、左上腕骨の内側上顆を含む骨体遠位1/2、左尺骨骨体近位1/2、右上腕骨骨体遠位部、右大腿骨骨体近位1/2、右胫骨骨体中央部のみ、これ以外に肋骨や四肢長骨の骨体の一部と思われる破片が多数存在するが同定はできない。

#### ●人骨の特徴

大脛骨の粗線はよく発達し柱状性を示すが、何れの骨も比較的きやしゃである。

#### ●年令と性別

骨の表面の状態などから、おそらく成人と思われる。成人とすれば女性の可能性が大きい。

### 土塙墓XIII人骨

#### ●保存状態

保存は比較的良好で、椎骨と肋骨の大部分を除けば、ほぼ全身の骨格が残っている。

頭蓋骨：脳頭蓋では、前頭骨の一部と左顎頂骨前半部および左右の側頭鱗の上部を除き、頭蓋冠のはば全体が残存し、頭蓋底を構成する側頭骨の全体と左右蝶形骨の大翼後半部が存在する。顎面頭蓋では、下顎骨はほぼ完全で、上顎の歯槽および口蓋部は比較的よく保存されているが、それより上の顎面部の保存は悪く、右鼻骨の破片と左右の顎骨のみが残っている。歯牙は、上顎では左の第2小白歯、側切歯、中切歯と右の第1、第2小白歯が釘植し、左第1小白歯

歯と右中切歯は歯根のみが歯槽内に残る。右側切歯と左右の犬歯の歯槽は閉鎖しており、大臼歯の歯槽は左右とも退縮している。左第1、第2大臼歯の歯槽はえぐられたように侵食され、おそらく上頸洞との間の骨壁にも穿孔していたと思われる。侵食は隣接する口蓋部にも及んでいる。下顎では、左の第2小白歯から後の歯と右の第2、第3大臼歯が釘植するが、右の第2、第3大臼歯は歯頸の頬側に齶食が見られ、その侵食は第2大臼歯では頬舌径の約1/4、第3大臼歯では約1/2に達している。左の第3大臼歯は歯頸より上部が失われているが、これも同様の齶食によるものと考えられる。左の側切歯と右第1大臼歯の歯槽は閉じ、その他は開いている。

胸骨：椎骨では、環椎と仙骨のそれぞれ破片のみが存在する。肋骨も破片のみ数個存在する。

上肢骨：右は肩甲骨の関節窓付近、近位骨端を除く上腕骨、橈骨骨体の近位2/3、肘頭と遠位端を除く尺骨、大菱形骨、有頭骨、有鈎骨、第1から第5中手骨が残るが、第1以外の中手骨は骨頭を欠いている。左は上腕骨、橈骨、尺骨の何れも骨体のみが存在する。これらの他に、右鎖骨の一部と思われる破片が存在する。

下肢骨：寛骨は左右とも寛骨臼と大坐骨切痕を含む部分が存在し、左ではさらに恥骨上枝までが残っている。大腿骨は、右はほぼ完全で、左は遠位端を欠き、脛骨は左右とも両端に破損があるがほぼ全長にわたって存在し、腓骨の右は両端のみ、左は遠位3/4が残っている。膝蓋骨は左右とも存在する。足の骨では、左右の距骨、踵骨、舟状骨、左の立方骨、内側および中間楔状骨、第1から第5中足骨、第1基節骨が残っているが、一部は破損している。

#### ●人骨の特徴

上顎の犬歯の歯槽は左右とも閉鎖しており、人為的な抜歯の可能性がある。三主縫合は何れも内板が閉鎖している。歯牙の咬耗は、相対する歯が生前に失われていたもの以外では、何れも全面に象牙質が露出している。なお、上顎の右第1小白歯は頬側が著しく磨滅し、その面は咬合面と約30°の角度を持っている。粗線や三角筋粗面、尺骨の方形回内筋付着部などの発達はかなり強く、乳突起、乳突上隆線の発達も中程度であるが、上項線、ヒラメ筋線は弱い。

眉間部が破損しているために正確な頭骨最大長を知ることはできないが、残存部位から推定した値は173mmで、これより長幅示数は82.1と推定され、短頭に属する。右大腿骨最大長からピアソン式によって推定した身長は、女性だとすれば、151.0cmとなる。

#### ●年令と性別

縫合の閉鎖や歯牙の咬耗の状態から、年令は熟年と推定した。性別は、大坐骨切痕の形から女性と判定される。

#### 土塚墓 XIV人骨

#### ●保存状態

脳頭蓋は、頭蓋冠のほぼ全体が残るが、頭蓋底では左右の側頭骨、蝶形骨大翼、左舌下神経管付近の後頭骨の破片のみが存在する。顔面頭蓋では、左の上顎骨歯槽突起と頬骨が存在し、下顎骨は右下顎板を除くほぼ全体が残っているが、下顎体と左下顎板は接合できない。胸骨では、椎骨と肋骨の共に破片のみが存在する。上肢では、右は鎖骨骨体の破片、上腕骨骨体遠位

2/3、尺骨の鉤状突起から骨体近位1/2、橈骨骨体近位1/3が残り、左は上腕骨骨体遠位1/2、尺骨骨体近位部の破片が存在する。また、これ以外に、手の指骨と思われる破片や、上腕骨頭の一部、肩甲骨の一部などと思われる破片も存在するが同定できない。下肢では、寛骨は右脛骨の大坐骨切痕付近の破片が存在し、大腿骨の右は骨体のはば全部、左は骨体中央部が存在し、他に、左右の胫骨骨体の破片と出土状態から右腓骨骨体の一部と思われる破片が存在する。

歯牙は、下顎左の第1、第2小白歯と第1大臼歯のみ釘植しており、上顎右の側切歯、下顎の左第3大臼歯、右の第2、第3大臼歯の歯槽は閉鎖し、上顎左の側切歯から第2小白歯までと右の中切歯、犬歯、下顎左の第2大臼歯、犬歯、側切歯、右の中切歯から第1大臼歯までの歯槽は開いている。

#### ●人骨の特徴

冠状および矢状縫合は外板、内板とも閉鎖する。人字縫合については、割れ目に当っているために確認できない。歯牙の咬耗は、下顎左第1大臼歯では全面、第2小白歯でも歯冠の2/3にわたって象牙質が露出している。

左右の人字縫合に縫合骨が存在する。乳様突起は比較的大きく、乳突上隆線やグラベラ、上頸線などの発達は中程度で、外後頭降起は比較的よく発達する。大腿骨は粗線の発達が著しく、柱状大腿骨となっている。

#### ●年令と性別

縫合の閉鎖と歯牙の咬耗の状態から老年と推定される。性別は、骨が全体的に頑丈であることから男性と判定した。

#### 土塙墓XV人骨

#### ●保存状態

頭蓋では、左右の前頭骨、頭頂骨、左側頭骨、左蝶形骨大翼、後頭骨底部、左上顎骨、下顎骨の左右の下顎体と左関節突起付近がそれぞれ分離して存在する。歯牙は、第1乳臼歯から前方の乳歯が萌出し、第2乳臼歯は何れも歯槽内にある。萌出した歯牙は、上顎左の第1乳切歯と第1乳臼歯、下顎左の第1乳臼歯、右の第1乳切歯から第1乳臼歯までが残存する。胸骨では、肋骨の破片と椎骨がいくつか存在し、椎骨は椎体と椎弓が分離している。四肢骨では、左の橈骨と尺骨近位1/2が同定され、これ以外に大腿骨と胫骨の膝関節付近および上腕骨骨体の一部と思われる破片があるが、同定はできない。

#### ●年令と性別

歯の萌出状態から、年令は1ないし2才と推定される。性別の判定はできない。

#### 土塙墓XVI人骨

#### ●保存状態

頭蓋では、前頭骨、頭頂骨、後頭骨の一部と思われる破片が多数存在するが、部位は特定できない。副骨は存在しない。上肢では、右上腕骨の肘頭窩付近、左上腕骨骨体の一部、右の橈骨と尺骨のそれぞれ骨体が存在する。下肢では、左右の腸骨および大腿骨、胫骨、腓骨のそれ

それ骨体が存在する。これ以外に、手または足の長管状骨の破片が存在するが、部位は特定できない。

#### ●年令と性別

骨の大きさや骨化の状態から、年令は3才前後と推定される。性別の判定はできない。

これら以外に搅乱層から、頭頂骨の一部と思われる破片3個、下顎左第3大臼歯、手の基節骨、左大腿骨骨体近位1/4、小児の頭骨片数個と左上腕骨骨体中央部が出土している。

第1表 頭蓋骨計測値

	XIII(♀)	XIV(♂)
1 頭骨最大長	178	
2a ナジオン・イニオン長	163	
3 グラベロ・ラムダ長	177	
8 頭骨最大幅	142	
9 最小前頭幅	97	98
10 最大前頭幅	120	
11両耳幅	124	
12 最大後頭幅	113	108
13 基底幅	(103)	
20 耳ブレグマ高	119	
26 正中矢状前頭弧長		127
27 正中矢状頸項弧長	127	130
28(1)正中矢状上構弧長	82	73
29 正中矢状前頭弦長		114
30 正中矢状頸項弦長	111	118
31(1)正中矢状上構弦長	74	70
62 口蓋長	(42)	
65 開節突起幅	(133)	
66 下顎角幅	(108)	
68 下顎骨長	(74)	
69(2)下顎体厚	(27)	(29)
69(3)下顎枝高	10	11
70 下顎枝高	64	
71 下顎枝幅	32	35
79 下顎角	120	

第2表 四肢骨計測値・示数

	XII(♀)		XIII(♀)		XIV(♂)	
	l	r	l	r	l	r
<b>上腕骨</b>						
4 下端幅					56	
5 中央最大径	24		24	23		
6 中央最小径	18		15	15		
7 骨体最小周	64		56	58		
7a 中央周	72		68	68		
6/5 骨体断面示数	75.0		62.5	65.2		
<b>橈骨</b>						
3 最小周					38	
<b>尺骨</b>						
11 前後径			11	11		
12 橫径			17	18		
<b>大腿骨</b>						
1 最大長					402	
6 中央矢状径	28	28	29	29	30	
7 中央横径	26	26	26	25	26	
8 中央周径	85	86	87	86	88	
9 上部横径	30	31	32	33		
10 上部欠状径	21	23	23	23	25	
15 頑直徑	30	26	28			
16 頑矢状径	24	20	22			
19 頑欠状径			40			
6/7 中央断面示数			107.7	107.7	111.5	116.0
10/9 上部断面示数			70.0	74.2	71.9	75.8
<b>脛骨</b>						
8 中央最大径			30	30		
9 中央横径			19	20		
8a 索養孔部欠状径			31			
9a 索養孔部横径			22			
10b 最小周			73	73		
9/8 中央断面示数			63.3	66.7		
9a/8a 脊示数			64.7			

(多賀谷 昭)

## 6. 動物遺体

口下遺跡から出土した動物遺体は少ないが、保存状態は比較的良好である。出土骨は縄文時代晩期の貝塚Ⅰが最も多く、次いで、縄文時代晩期から中世までの擾乱層に多く出土している。また、縄文時代後期の貝塚Ⅱからも骨片は出土しているが、種数、量ともに少ない。石組の周辺や古墳時代の溝からも骨片は検出されているが、種を同定できる部位はない。また、イヌの骨のみが出土した土塁が2基発見されている。

各々の層から出土した種の出現表を第3表に、また、出土量が多かったシカ・イノシシの出現部位と最少個体数を第4表に示した。なお、最少個体数は出現頻度数の最も多い部位の数である。哺乳類の同定には、肋骨ならびに椎骨と指趾骨を除外した。

### 哺乳類

シカ 最少個体数は貝塚Ⅰで右前頭骨と左顎骨の3であり、貝塚Ⅱで右寛骨の1、擾乱層では左寛骨の3である。貝塚Ⅰは擾乱層より骨片の出土量が多いにもかかわらず、最少個体数は同数であった。これは、この2層ともに出土骨があまり多くなかったこと、さらに長管骨は破損が大きく、同定できる部位が少なかった結果と考えられる。また、貝塚Ⅰではシカの角の破片の出土が多く、人工的な加工の痕跡もみられ、骨角器の製作の跡がうかがえる。貝塚Ⅰと擾乱層に未萌出の臼歯や、長管骨骨端の骨化が不完全なものも出土しているため、幼体も捕獲していたことが推測される。土塁墓XIVより左大脛骨の体が出土している。

イノシシ 最少個体数は貝塚Ⅰで左上顎骨と左上顎第1、第2大臼歯と右下顎骨の3、貝塚Ⅱで左上腕骨と左脛骨の1、擾乱層では左下顎第3大臼歯の2である。イノシシはシカに比して頭蓋骨（歯も含む）の出土が多く、四肢骨は少ない。

イヌ イヌを埋葬したと考えられる2基の土塁には、イヌの骨のみが出土している。土塁35は縄文時代晩期のもので、この中には頭部を上に、背を丸くして埋葬したと推測させる状態で、ほぼ完全な全身骨格が出土している。しかし、脳頭蓋と指趾骨は失なわれていた。一方、縄文時代晩期から古墳時代以前のものとされる土塁46から出土した骨は、左の大腿骨近位部と左寛骨のみである。この土塁は13世紀の擾乱によって一部が破壊されているため、骨が一部失われたものと考えられる。この他にも、貝塚Ⅰよりイヌの右下顎第1前臼歯が出土している。

その他の哺乳類 ハタネズミと思われるネズミの右下顎骨が完全な状態で出土している。また、ネズミ類の左上顎第1切歯もハタネズミと共に貝塚Ⅰより出土している。リスト科の未萌出臼歯と磨耗の進んだ上顎第3大臼歯が貝塚Ⅰより出土している。土塁墓XIIIより、ウサギ科のノウサギの右上腕骨の遠位端が出土している。クジラの椎体の一部と推測される骨片が擾乱層にみられた。

### 鳥類

コウサギ目の中でも大型のものと思われる頸椎の一部が一片、貝塚Ⅰより出土している。

### 爬虫類

少數のヘビの椎骨とスッポンの肋骨が貝塚Ⅰから出土している。

### 両生類

大小さまざまなカエルの椎骨と長管骨が比較的多数出土している。その中でも最も大きな椎骨はヒキガエルであると思われる。

#### 魚類

淡水産魚類はコイ、ニゴイ、フナ類の歯や咽頭歯がみられ、海水産魚類はサワラやタイ類の歯や頸骨が出土している。しかし、出土量が少ないので、淡水産魚類と海水産魚類の量的な比較は困難である。

#### まとめ

日下遺跡出土の動物遺体の構成は主にシカとイノシシである。しかし、貝塚Iの貝は主にセタシミであり、さらにカエルなどの湿地に生息する小動物の出土も多く、貝塚Iが形成された縄文時代晩期の河内平野の状況（梶山ほか 1985）を考えると、この遺跡は河内潟か河川の近くに位置していたと推測される。また、貝塚Iと同時代の埋葬火も発掘され、狩猟活動などの人との深いつながりがうかがえる。一方、擾乱層もその主体はシカとイノシシであり、魚類などの出土量は少ない。しかし、1片ではあるがクジラがこの層にのみ出土していることは注目される。

これらの動物遺体の構成や環境を考えると、今回調査された遺跡は貝塚を形成しているとは言え、必ずしも漁業を中心の生活ではなく、むしろ、イヌを伴なった活発な狩猟活動がうかがえる。

#### 参考文献

梶山彦太郎・市原 実 1985 「縄文大阪平野の発達史」 古文物学研究会

第3表 動物遺体の出現表

	種	貝塚	擾乱層	土壌	土壌基層	土壌上層	上層		
							I	II	III
<b>哺乳類</b>									
偶蹄目	シカ科 イノシシ科	シカ イノシシ	○○○	○○○	○	○			
偶蹄目	ホツモツ科		○○○	○○○					
兔目	ウサギ科	ノウサギ							
食肉目	イヌ科	イヌ	○	○○○					
蝶類				○		○			
<b>鳥類</b>									
コウリギ目				○					
<b>爬虫類</b>									
カメ目	スッポン科	スッポン	○						
ヘビ目		ヘビ	○	○					
<b>両生類</b>									
カエル目			○	○					
<b>魚類</b>									
コイ目	コイ科 ニゴイ科	コイ ニゴイ		○○○					
スズキ目	サバ科 タイ科	サワラ ハダイ	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○			
種不明									

第4表 シカ・イノシシの出現頻度と最少個体数

	貝塚 I		貝塚 II		貝塚 III		貝塚 IV		貝塚 XV	
	シカ		シカ		シカ		シカ		シカ	
	カ	シ	カ	シ	カ	シ	カ	シ	カ	シ
前頭骨	右	3	東	1						
	左	2								
頭頂骨	右	1								
	左	1								
側頭骨	右	1								
後頭骨		1	1							
鼻骨	右	1		1						
	左			1						
顎骨	左		2							
前上顎骨	右			1						
I <sup>1</sup>	右			1						
	左		1							
I <sup>2</sup>	右		1		1					
	左		1							
I <sup>3</sup>	右		1							
上顎骨	右	1	1							
	左	1	3	*						
Pm <sup>1</sup>	左	1	1							
Pm <sup>2</sup>	右	1								
	左	1	2							
M <sup>1</sup>	右	2								
	左	2	3	*						
M <sup>2</sup>	右	1	1							
	左	2	3	*	1					
M <sup>3</sup>	右	1	1							
	左	2	2	1						

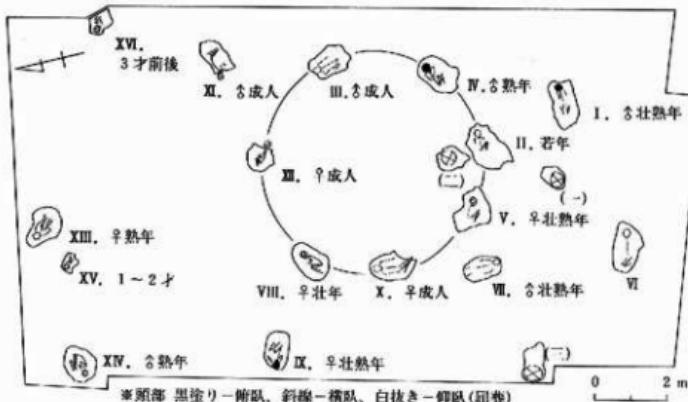
\*は最少個体数  
\*は幼体を含む

(安部 みき子)

### 7.まとめ

今回の調査では縄文時代の土塙墓6基・大埋葬の土塙・貝塚・住居跡・古墳時代の溝などを検出した。埋葬人骨のうち、成人人骨で頭骨の存する土塙墓XIII・XIVについては抜歯と思われる歯槽の閉鎖を確認した。以下、縄文時代の遺構について簡単に記述する。

土塙墓 土塙墓は昨年度の調査で検出した13基（3基は縄文）と合わせ、約200m<sup>2</sup>の中に19基存したことになる。今回検出した6基のうち1基（土塙墓XII）は11次調査で想定した環状列墓の1つである。環状列墓は径6.2mの円に7基の土塙墓で構成していた。前調査において、向い合う埋葬人骨が男・女で対をなすと考えていたが、土塙墓V（女性）に対する土塙墓XIIが成人女性である可能性が大きいことから、男女の相対関係はなくなった。また土塙墓IIに対する土塙墓を検出することはできなかった。以上のことから、速断はできないが、土塙墓IIの若年者とその内側に幼児埋葬としての縄文墓があり、その他が壮年以上の成人男女であることなど、



第13図 第11・13次調査範囲時代土塚墓群図

環状列墓は一家族を構成していると考えられるのであるまいか。

貝塚 今回の調査までは日下遺跡南部（史跡、日下貝塚周辺）でしか貝塚を確認していなかった。11次調査の第2トレーナーにおける近代以降の擾乱層から多量の貝・縄文土器・サヌカイトを検出したことや周辺住民の聞き取り調査により、北部地域にも貝塚の存在を推定していたが、今回はじめて2ブロック検出した。貝塚からは多量の貝とともに獸骨・縄文土器・サヌカイトが出土している。当遺跡で確認されている貝は19種—セタシジミ・オオタニシ・チリメンカワニナなどの淡水産5種、ハマグリ・カキ・サザエ・アカニシなどの海水産12種、ナミマイマイなどの陸産2種—であるが、今回セタシジミなど11種の貝を検出したが、ナガタニシ・イシガイ・マツカサガイ・クロダカワニナ・サルボウ系の貝と新たに検出したものがあり、当遺跡の貝は淡水産9種、海水産13種、陸産3種の25種となった。獸骨はイノシシ・シカが多く、マダイ・フグなどの魚類、赤ガエル(?)、鳥類1が報告されているが、今回新たに、スッポン・ヘビ(爬虫類)、コイ・ニゴイ・フナ・サワラ(魚類)、ハタネズミ・リス科の動物(哺乳類)、コウサギ(鳥類)などを検出した。貝・獸骨とも海水産のものも出土しているが、その割合は少なく、本遺跡の立地から見ても、主流は山川原野のものを食していたと考えられる。

住居 本遺跡で縄文時代の住居を検出したのは今回が最初である。住居はやや楕円形を呈する小型住居であり、そのほぼ中央には方形の石組炉があった。縄文時代の石組が東大阪市内でも馬場川遺跡で3基、縄手遺跡で1基検出しているが、いずれも野外に作られたものであり、長辺30~10cmの石を長径80~90cmの円または楕円に囲んだものである。方形石組が初めてであり、近畿地方でも兵庫県穴粟郡一宮町福野遺跡で1例検出されているだけである。

(1) 東大阪市教育委員会『日下遺跡発掘調査概要—第11・12次調査—』1985

(2) 帝塚山大学考古学研究室『東大阪市日下遺跡調査概要』考古学シリーズ2 1967

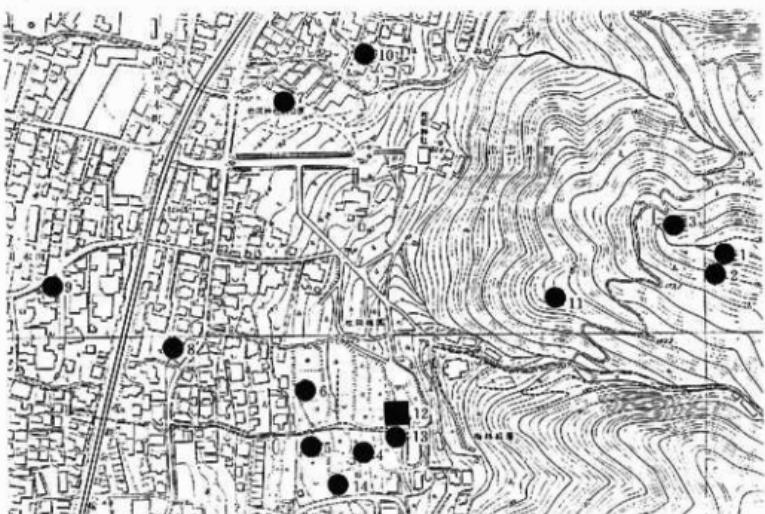
酒詠仲男『日本縄文石器時代食料総説』1962

## 第3章 出雲井7号墳発掘調査

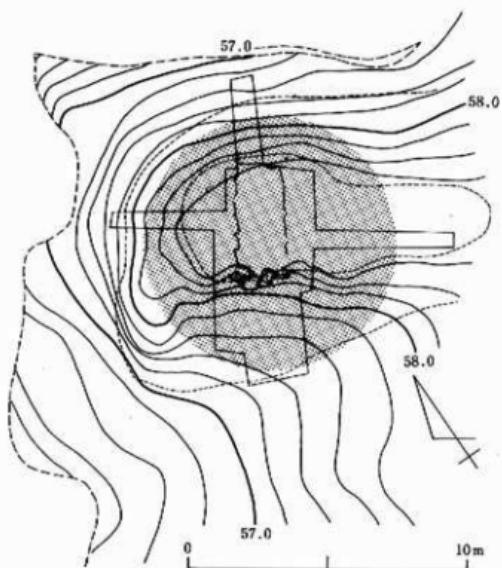
### 1. 出雲井古墳群の概要

出雲井古墳群は東大阪市出雲井町、出雲井本町、五条町にかけて分布する古墳時代後期の群集墳である。現在14基が確認されており、さらに数基の存在が伝えられている。当古墳群は、東大阪市の東端を南北に連なる生駒山脈から西に派生した屋根上と、西流する小河川の堆積によって形成された複合扇状地の上部に位置し、標高約200mから40mの範囲に分布する。古墳群内には北西方向の小規模な谷地形がみられ、1～3、11号墳が北側尾根に位置する(北群)。北群は標高約200mに位置する1号墳を最高所として、3号墳の間に約10mの比高をもって集まる。南群は標高約90mに位置する12号墳と、標高約74mの6号墳を含む計6基を最も密度の高い地域として、他4基が西に点在する。北群は未調査のため詳細な時期は不明であるが、一部について石室実測が行われており、6世紀中～後半頃と考えられる。南群は昭和60年11月より4～6、12～14号墳についての発掘調査が実施されており、6世紀中頃から7世紀前半でも新しい時期のものが確認されている。8号墳は切石を使用した横穴式石室で7世紀前半に考えられ、北群に比して新しい時期の古墳が認められる。地形的にも北群が高所の尾根上に位置するのに対し、南群は、傾斜が緩やかになった付近、扇状地の上部に位置している点など、同一古墳群として捉える事に再検討が必要と考えられる。市内で確認されている古墳群において山畑古墳群に続く調査例を有することから、今後、他の小規模古墳群との対比、性格を考える上でも、重要な資料と考えられる。

(上野)



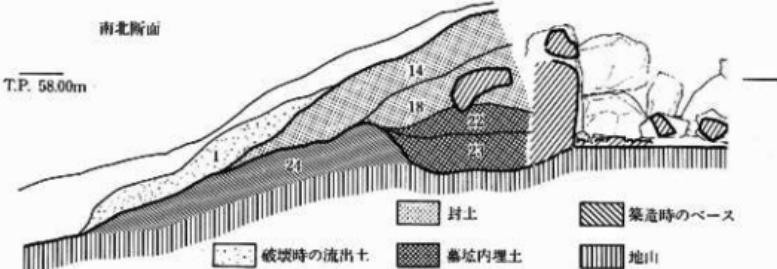
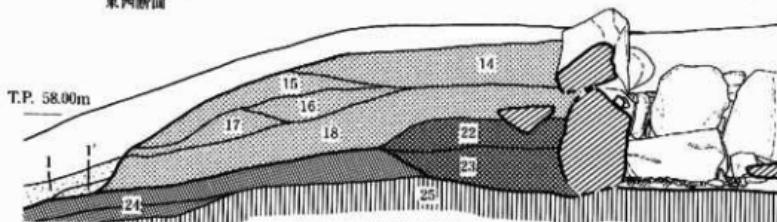
第14図 出雲井古墳群分布図(1/5000)



第15図 墳丘実測図(1/200)  
東西断面

## 2. 墳丘

墳丘の遺存状態は極めて悪い。後世の破壊により南半が欠失し、北半のみを残す。破壊された南半の斜面には石室の袖石が一部露出し、これを含めて幅約2mの石垣が築かれている。上部は削平を受け平坦となっている。北半に残る墳丘は、全体に削平時の土砂流出が認められるものの、北西部で旧状が残り、ほぼ円形を呈する。東側は削平時の土砂が堆積し、ほとんど旧状をとどめない。また、本墳周辺では土師器が散乱し、7世紀代と思われる羽筆が出土した。周辺にこの時期の遺構の



第16図 墳丘断面図(1/40)

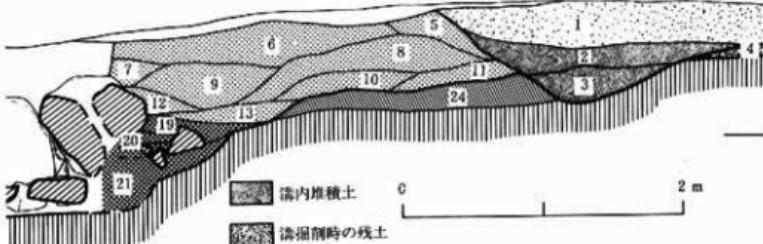
存在が考えられる。

墳丘は、東から西に下がる緩傾斜面に築かれ、基底部の高さは、山側58.5m、平野側57.5mを測り、1mの比高をもつ。墓塚底面では57.5mを測る。山側には幅1.2m、深さ0.3mの南北方向の溝が設けられ、墳丘裾部を区画する。溝の外側には掘削時の残土（第4層）が堆積し、溝の深さを増している。この溝状の掘込みは、北、西トレーニチでは確認できず、墳丘の山側のみに設けられている。

石室墓塚はトレーニチで確認するにとどまったが、幅4.7mを測り、方形と考えられる。山側で深さ0.8m、平野側で深さ0.3mとなり、底面はわずかに南へ傾斜する。北トレーニチでは、奥壁材の部分が一段深く掘られている。奥壁部が残存している限りで推測すれば、右側1石、左側2石の上端をそろえるためとも考えられる。

墓塚内の埋土は、石室構築に際して細かく行われたのではなく、一段目の石材を置いた後に一度に埋められたようである。山側は平野側に比してやや細かくなっている。この事は、封土の構築面でも観察する事ができる。東トレーニチでは、墳丘外側より内に向って細かく盛土され、この作業を繰り返しながら積み上げられているのに対し、北、西トレーニチでは、石室構築のみを先行する事なく、墳丘全体にはほぼ均等な厚さで盛土を行なっている。この事は、封土の流出を防ぐ意味であれば、山側と平野側の様相が逆になる可能性が高く、本墳の様相のもう一つ意図は不明である。

以上の墳丘断面の観察から、本墳の直径は8.8mとなる。しかしながら、今回の調査トレーニチ



1. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)中粒砂多量  
1'. 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y 4/2)細砂少量  
2. 黒褐色砂質シルト(10Y R 3/2)粗砂多量  
3. にじむ黄褐色砂質シルト(10Y R 4/3)粗砂少量  
4. にじむ黄褐色砂質シルト(10Y R 4/3)粗砂少量  
5. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)粗砂多量  
6. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)粗砂多量  
7. 暗オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 3/3)粗粒多量  
8. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)粗砂多量  
9. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)細砂少量  
10. 深黄褐色砂質シルト(10Y R 4/2)細砂少量  
11. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)粗砂多量  
12. 暗オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 3/3)ブロック土混  
13. 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y 4/2)中-粗粒砂多量  
14. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/2)粗粒砂多量  
15. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)粗粒砂多量  
16. 黄灰色砂質シルト(2.5Y 4/1)中粒砂多量  
17. 灰オリーブ褐色砂質シルト(5Y 4/2)細-中粒砂多量  
18. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)細砂、炭少量  
19. 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y 4/2)細-中粒砂多量  
20. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)細砂少量  
21. 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y 4/2)細-中粒砂多量  
22. オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 4/3)細砂、炭少量  
23. 暗オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y 3/3)中粒砂多量  
24. 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y 4/2)細砂少量  
25. 暗オリーブ褐色砂質シルト(10Y R 4/2)細砂多量

が玄室の中央部に当たる点から、本来の規模よりも小さい数値を示していると考えられ、約10m近くになる可能性も考えられる。高さは平野側で約1mが残っている。

前述したように、本墳は後世に破壊されており、破壊時の土砂が石室床面近くまで堆積している。石室内には13世紀後半に瓦質三足鍋を使用した再埋葬の痕跡が認められ、少なくとも13世紀以後の破壊と考えられる。また、他に13~15世紀代と考えられる土師器小皿が上層より出土している事から、この時期に現状に近い状態まで破壊された可能性が高いと言えよう。(上野)

### 3. 石室

本墳の主体部は、主軸がN36°W方向の左側壁に袖部を有する片袖式の横穴式石室である。石室の遺存状態は悪く、羨道部は欠失している。玄室は上部が削平を受け2段の石材が残るのみである。2段目の石材も一部が抜きとられ、また、右側壁が内側に傾くなど、破壊時にかなり動いたものと思われる。基底部は比較的良好な状態で遺存する。

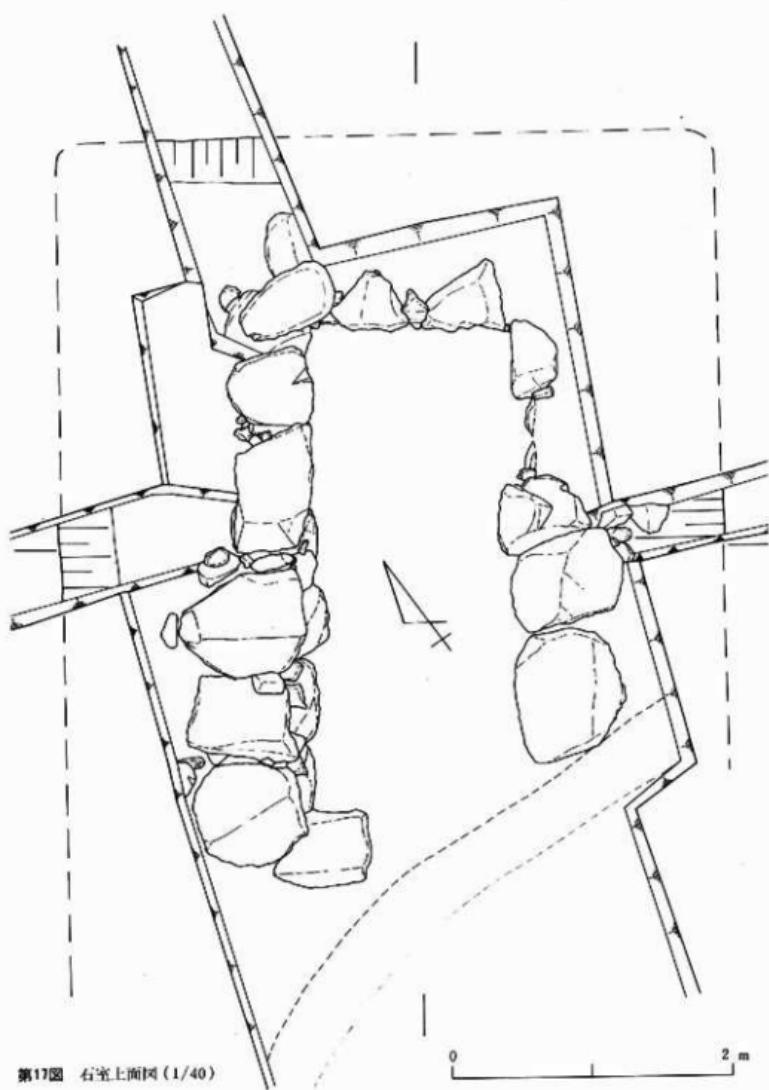
玄室の規模は奥壁部の幅1.5m、玄門部での幅1.6m、玄門幅1.2m、長さ3.5mを測る。奥壁は、右側1石、左側2石で構築される。左側壁1段目は、同規模の石材を6石使用し、平坦な面を内に向ける。したがって上端で横方向の目地がそろう。2段目は1段目と比して不揃いであり、三角形に近い面をもつ石材を使用する。3段目が各石材間にはまり、横方向の目地をそろえる意識がうかがえる。右側壁1段目は左側壁に比して小型の石材を使用し、不揃いである。2段目ではやや大型のものを使用し、横方向の目地をそろえる努力がうかがえる。

石室の構築順序は、石材の重なり、小型の詰石から観察した場合、まず奥壁材、袖石を置く。次に左側壁1段目では、奥壁の外側に1石を置き、袖石より奥に向って順次4石を置く。最後に、小型の詰石を詰めながら1石をはめ込む形をとる。右側壁も左と同様に奥壁側の石材を置き、その後に玄門から奥壁に向って順次置いたと考えられる。2段目については、破壊時の石材の移動が大きく、推測しがたい。

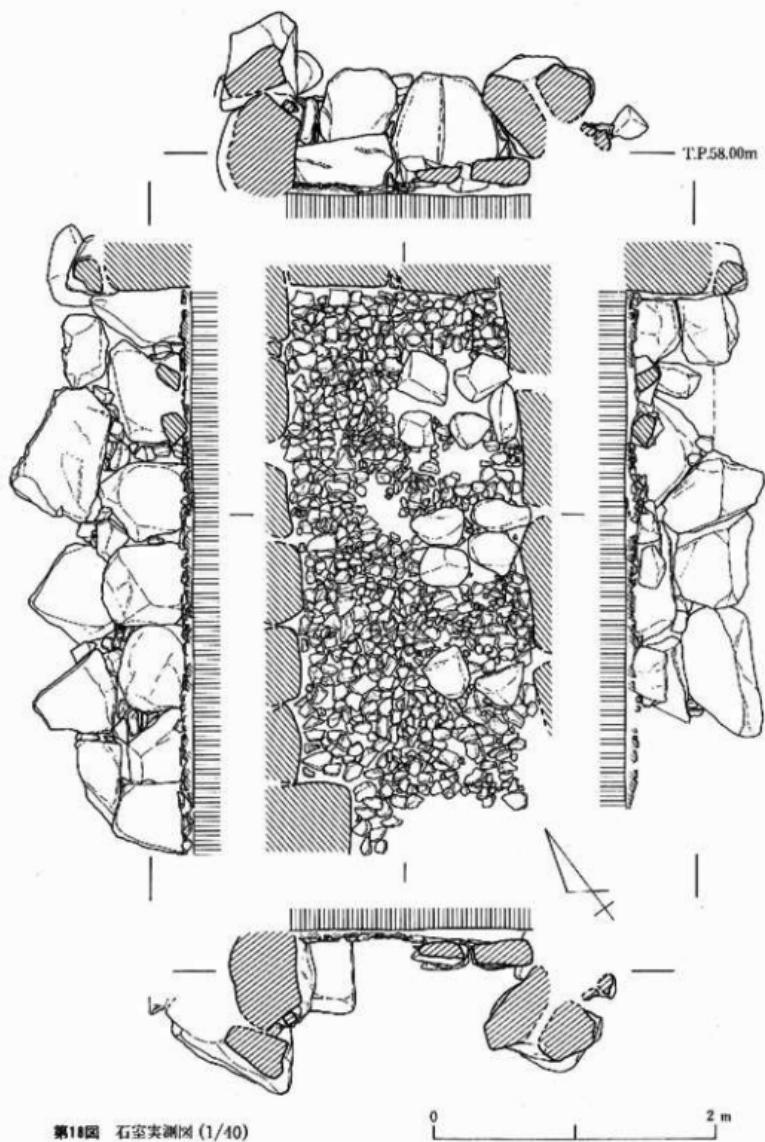
羨道部が欠失しているため、全体の構築順序は不明であるが、出雲井5号墳にもみられるように、羨門、袖部、奥壁、あるいは玄門部天井石等が構築の基準となっているようであり、本墳においても、玄室部のみではあるが、上記の事をうかがう事ができよう。

石室床面は、径5~10cm大の自然石を玄室全面に敷く。玄室右側には、5列11個の石材を置き、棺台としている(説明上、奥壁側より第1列~第5列と呼ぶ)。第1、4列は敷石を除去した後に置かれ、他列は敷石上に置かれている。特に第3列は石材の上に除去された敷石が積まれ、追葬時に置かれたと考えられる。5列全てが1体の追葬か、あるいは棺台下面の敷石の有無により2体の追葬と考えるかは結論しがたい。棺台の上端はほぼ水平となっており、敷石の有無は、水平に保つための差異とも考えられよう。

(上野)



第17図 石室上面図 (1/40)



第18図 石室実測図 (1/40)

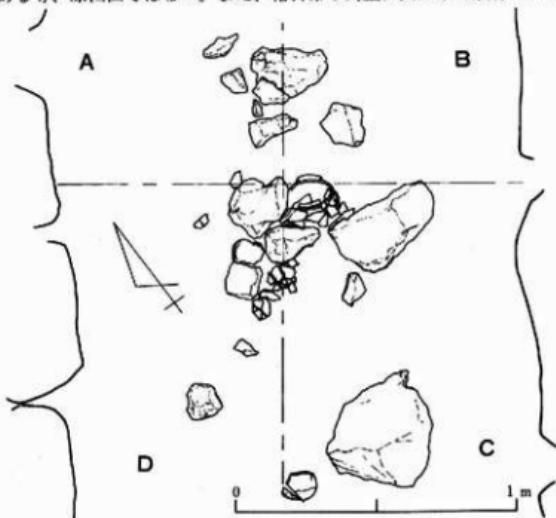
0 1 2 m

#### 4. 石室内遺物出土状況

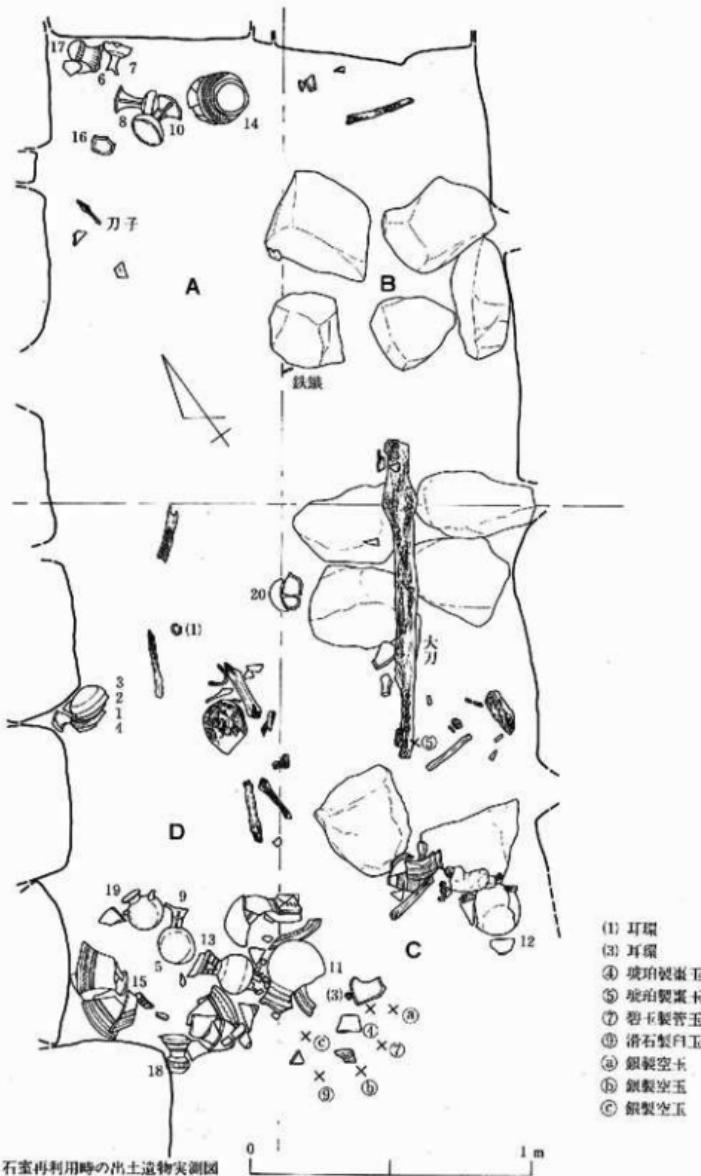
石室内の調査に当っては、試掘結果より玉類の出土の可能性が考えられたため、玄室内を4区(A~D区)に分け、床面上部の埋土を全て採集し、水洗選別を行った。また、玄室内の遺物は、後世の破壊を受けたものの、比較的良好な遺存状態といえる。漢道部については、床面および石材の抜き跡も残らず、遺物は出土しなかった。

遺物の出土地点は、大きく分けて奥壁部(第1群)、左側壁沿い(第2群)、袖部(第3群)、棺台上(第4群)の4ヶ所である。第1群(脚付有蓋壺14、蓋6、高杯7・8・10、甕17、短頸壺16)は、短頸壺を除き今回の遺物群の中で最も遺存状態が良く、追葬時にわずかな移動は認められるものの、ほぼ原位置と考えられる。第2群(杯1・2、蓋3・4)は4点が下より蓋・杯・杯・蓋の順序で重なった状態で出土しており、第1群と同様に原位置に近いと考えられる。両群とも敷石直上の出上である。第3群(脚付有蓋壺13、広口壺11・12、高杯9、甕18、器台15、蓋5)は、第1・2群に比して細片になっているものが多く、散乱している。敷石との間に埋土がつまるものもあり、追葬時に破碎されたと考えられるが、いずれも袖部付近にあったと考えられる。第4群(土師器杯20、大刀)は、いずれも棺台上に重なる。追葬時の遺物であろう。鐵製品には大刀以外に刀子と鐵鎌が出土した。刀子は第1群付近、鐵鎌は棺台の付近である。鐵釘は床面上層より出土しているが、中世期の土器を含む層内であり、後述の石室再利用時に移動したものと考えられる。

人骨は明確なものが頭骨2体分ある。中央部西側の頭骨は床面上直上に出土したが、下顎骨がはずれ、耳環が頭骨内にある等、原位置ではない。また、棺台第5列上に出土した頭骨はほとんど原形が失なわれている。他の人骨については遺存状態が悪く、主体部の位置は不明である。石室再利用時の遺物として瓦質三足鍋がある。これは床面より約20cm上部で出土し、周囲にこぶし大から人頭大の石を置いている。また、土師器小皿、瓦器碗が出土しており、三足鍋が藏骨器として使用された可能性が考えられる。(上野)



第19図 石室再利用時の遺物出土状況 (1/20)



第20図 石室再利用時の出土遺物実測図  
(1/20)

## 5. 遺物

### 石室床面出土遺物

石室床面からは、須恵器・土師器のほか、鏡・刀子・大刀の鉄製品、耳環・玉類などの装身具および人骨を検出している。

#### 須恵器（第21図・第22図）

須恵器には、杯2、蓋4、甕2、無蓋高杯4、提瓶1、脚付有蓋壺2、短頸壺1、広口壺2、器台1の計19点があり、すべてほぼ完形に復原し得る。

#### 杯（1・2）

たちあがりは、内傾し端部を丸くおさめる。受部は、水平または外上方へのび、先端を丸く仕上げる。底部は、やや扁平で浅い形態を呈する。底部外面は、全体の1/3程度の狭い範囲を右まわりのロクロによって回転ヘラケズリ調整する。

#### 蓋（3～6）

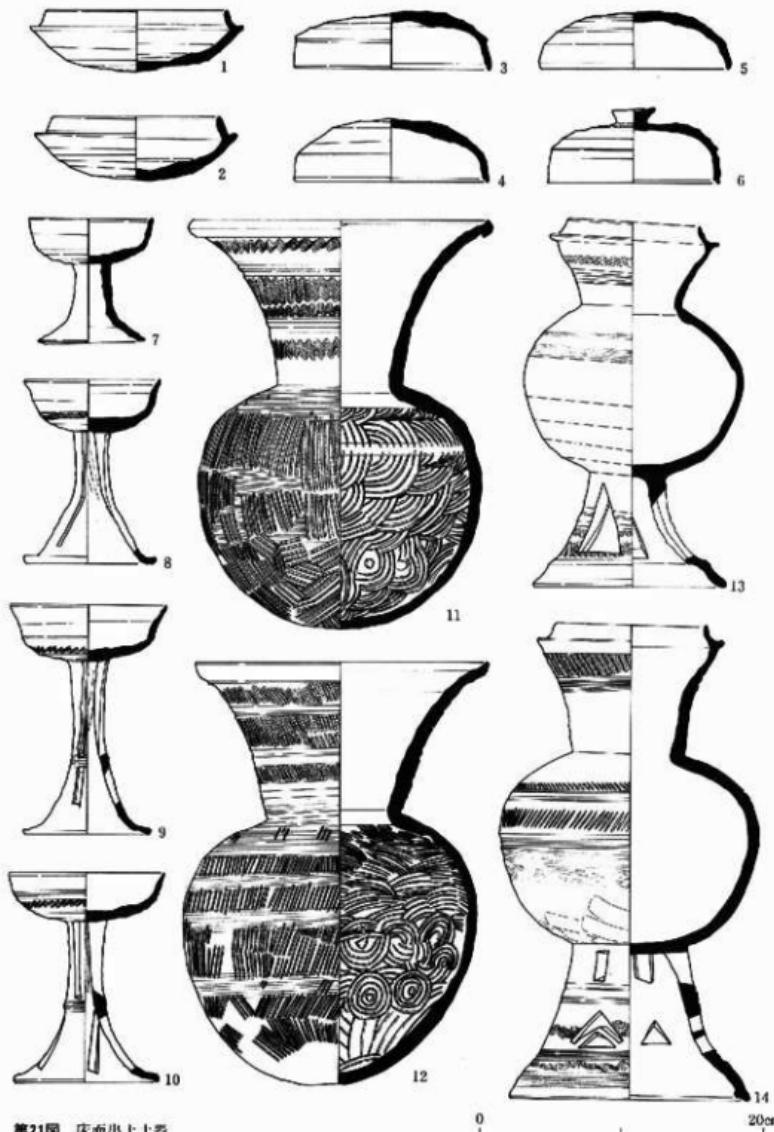
蓋には、天井部につまみを付けず、杯とセットを構成するもの（3～5）と、天井部中央につまみをもち、有蓋脚付壺とセットをなすもの（6）がある。

（3・4）は、天井部が扁平で、天井部と口縁部とを区切る稜線は、ほとんど突出せず鈍い。口縁端部は、段をなすもの（3）と内傾する面をもつもの（4）がある。双方とも天井部外面の約2/3を右まわりのロクロで回転ヘラケズリ調整する。（5）は、天井部を丸く仕上げ、天井部と口縁部との境界の稜線は、ほとんど尖なわれる。口縁端部は、丸くおさめる。天井部外面の1/2弱は、右まわりのロクロによる回転ヘラケズリ調整する。（6）は、やや扁平な天井部の中央に中凹みのつまみが付く。天井部と口縁部の境をなす稜線は、短く突出する。口縁端部は、内傾気味で段をつくる。器壁の凹凸は、ほとんど目立たない。天井部外面の回転ヘラケズリ調整は、約2/3の範囲におよぶ。

#### 無蓋高杯（7～10）

細長い脚部に長方形透しを穿つもの（8～10）と、透しを施さないもの（7）がある。

（8・9）は、口縁部が外反し、端部を尖がり気味に仕上げる。口縁部と杯底部との境界には、わずかな後をもつ。杯底部には櫛描き列点文や粗雑な櫛描き波状文を巡らす。杯底部文様帶下位の狭い範囲には、右まわりのロクロによる回転ヘラケズリ調整を施す。脚部は、細長くのび裾部で大きく広がる。脚部の装飾は、一段の細長い長方形透しを3方向から施すもの（8）と、脚部中央やや下位に凹線を巡らし、上段に細長い長方形透しを、下段にやや短かめの長方形透しを縱一列にならぶ位置に3方から施すもの（9）がある。脚端部は、斜上方にのびあがり面をなすもの（8）と、単純に狭い面を構成するもの（9）がある。脚部内面には、シボリメが認められる。（10）の口縁部は内弯し、端部を尖がり気味におさめる。口縁部と杯底部との境は、凹線によって画される。杯底部には、雑な櫛描き波状文を加え、文様帶の下位に回転ヘラケズリ調整を施す。脚部は細長くのび、脚部中央やや下位にある凹線によって二段に分かれる。透しは脚部の上下段に細長い長方形透しを千鳥状に3方向より加える。裾部は、大きく開き、端部を



第21圖 床而出上上卷

0 20cm

内側に肥厚させる。脚部内面には、シボリメを残す。なお、脚部は大きく焼け歪む。(7)の口縁部は内弯気味で、端部に内傾する面をもつ。口縁部と杯底部を分ける稜は、不明瞭である。脚部は細く、裾で大きく開く。脚端部は、肥厚する平坦な面をもつ。

#### 広口壺(11・12)

口縁端部には、上下に拡張するもの(11)と上方につまみ上げるもの(12)がある。口縁部は著しく発達し、凹線によって3段に区分される。各段には、櫛描き波状文や櫛描き列点文を施す。体部は球形を呈し、叩き成形後カキメ調整を加える。体部内面には、当て具痕を明瞭に残す。(12)の当て具痕は、体部上位部分と中・下位部分で異なる。

#### 脚付有蓋壺(13・14)

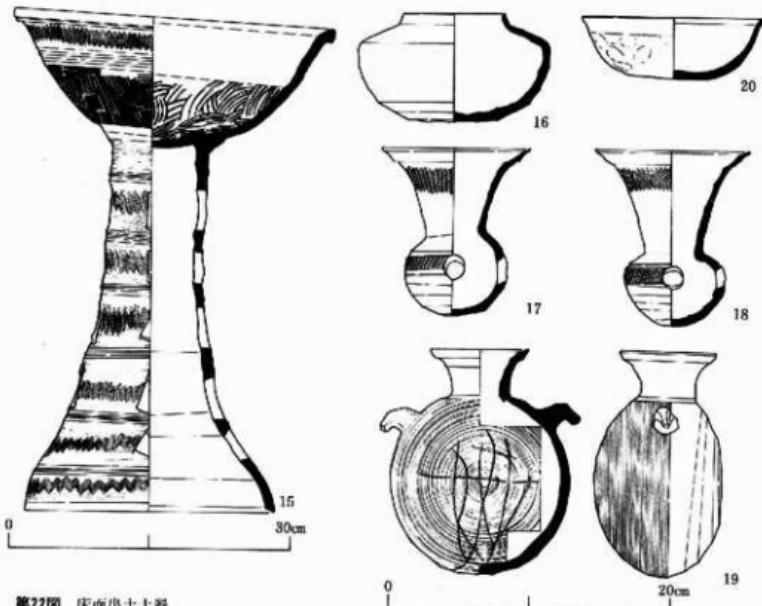
口縁部は内傾し、端部を丸くおさめる。受部は水平方向にやや突出し、先端を丸く仕上げる。頸部は長く外反し、中央部には、2条の凹線を施す。凹線直上には波長の短い櫛描き波状文を加え装飾する。体部は、やや肩の張る扁球形を呈する。(14)には、体部上半部と最大径の位置に2条1組の凹線と櫛描き列点文を加える。脚部は、大きく外方に開く。脚部の装飾法は、(13)が、脚部中央に2条の凹線を施し、凹線直下に櫛描き波状文を加え、さらに3方向から大型の三角形透しを穿つ。(14)は、凹線によって上下2段に区画する。上段には、幅広の長方形透しと幅の狭い長方形透しを交互に6方向から施す。下段は、櫛描き波状文施用後、小型の三角形透しに三角形の二辺を被う状態で八形を呈した透しと、やや大型の三角形透しを交互に巡らす。上・下段の透しは、縱一列に配置される。脚端部は、丸くおさめるもの(13)と内側に大きく肥厚させ広い面を構成するもの(14)がある。調整法は、(13)が体部上半部にカキメ調整を、下半部に回転ヘラケズリ調整を施す。(14)は、体部下半部にカキメ調整を、底部外面に横方向の手持ちヘラケズリ調整を加え仕上げる。

#### 高杯形器台(15)

杯部は浅いつくりで、口縁端部でゆるく外折する。口縁端部直下には、低い突帯を巡らす。口縁端部と杯底部との境には凹線を加える。凹線直上には、波長の短い櫛描き波状文を施す。杯底部外面には、擬格子タタキメを残し、内面には、これと対応する同心円状の当て具痕を残す。脚部は、細長く裾部へ大きくひろがり、凹線によって上下6段に区画する。脚部は全体にカキメ調整を施し、調整後各段に複数の櫛描き波状文を巡らす。脚部の透しは、上2段に長方形透しを、下3段に三角形透しを縱一列にならぶ位置に4方から加える。裾部は脚部のひろがりから傾きをかえ、内弯気味にたつ。裾部外面には、カキメ調整後に櫛描き波状文を施す。脚端部は大きく内傾する面をもつ。杯部と脚部は、両部位の調整完了後、外面から粘土を貼付けて接合する。

#### 短頸壺(16)

短い口縁部はわずかに内傾し、端部を丸く仕上げる。体部は肩の張りが強く、最大径の位置でゆるい稜をもつ。底部には、回転ヘラケズリ調整を加える。ロクロの回転方向は右まわりである。



第22図 床面出土土器

#### 瓶(17・18)

口頸部は、外上方へ大きく広がる。口縁端部は、尖がり気味に仕上げる。口縁部と頸部との境界は、ゆるい段をなし、段直下には波長の短い波状文を巡らす。体部には、球形を呈するもの(17)と、張りをもつ肩から尖がり気味の底部にいたるもの(18)がある。体部中央には、2条の凹線を加え、凹線間に備描き列点文を施す。体部下半は、右まわりのロクロによる回転ヘラケズリ調整を加える。

#### 提瓶(19)

口縁部は短く外反し、端部を外上方につまみ上げる。体部は前・背面とも丸くふくれる。肩部には、やや小型のカギ状把手を一对つける。体部前面にはカキメ調整後ヘラ記号を施す。背面は右まわりのロクロによって回転ヘラケズリ調整する。

#### 土師器(第22図 20)

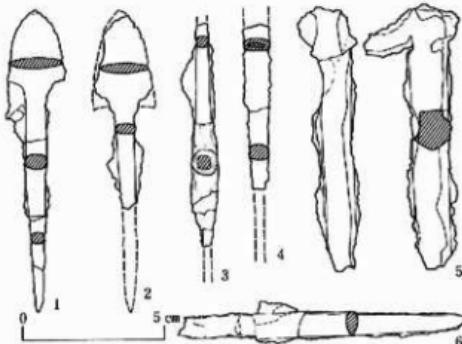
土師器は、杯一個体を検出しているのみである。口径13.2cm、器高4.5cmを測る。胎土内に、0.5mm前後の長石粒・くさり礫を含み極めて緻密である。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。体部下半から底部に黒斑が認められる。形態の特徴は、やや外反気味の口縁部から安定した丸い底部にいたる。口縁端部は、内側に傾斜する面をもつ。底部外面には、ユビオサエを残し、内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。口縁部外面の一部に煤が付着する。

### 鉄製品(第23図)

鉄製品としては、  
鉄鎌4・刀子1・大  
刀1を検出している。

### 鉄鎌(1~4)

全形の判明するも  
のは、(1)のみであ  
る。(1・2)は有茎三  
角式で籠被をもつ。  
鐵身の断面形は、レ  
ンズ状を呈する。(1)



第23図 出土鉄製品

あり、断面長方形である。茎は断面楕円形を呈し、茎尻を尖がらせる。(3)  
には、木質が残存する。

### 刀子(6)

刀身の長さ6.5cm・刀身の関部分の幅約1cm、茎は先端を欠損するが長さ2.8cm  
を測る。刀身の断面は、二等辺三角形を呈し、棟は平棟である。刀身と茎の間  
には明瞭な段をつける。茎は断面長方形で棒状を呈する。

### 大刀(第24図)

鋒の先端を欠損するが全長115cmある。刀身は、長さ95cm・幅約4.5cm・厚み  
0.9cmを測る。刀身は刃身・背とも長く直行する。刀身の断面は、二等辺三角形  
状で平棟、平造りである。刃身から茎へはゆるい段をもち、背側は滑らかに移  
行する。茎は、長さ20cmを測り、断面二等辺三角形で茎尻にむかって細くなる。  
目釘穴は锈のため観察できない。

### 装身具(第25図)

装身具には、耳環4・琥珀製垂玉3以上、滑石製白玉6、碧玉製管玉1、ガ  
ラス製小玉17、銀製空玉を検出している。

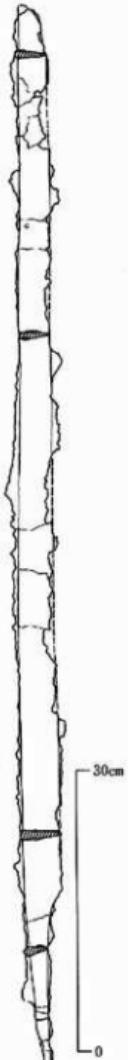
耳環(1~3)は、中実の鋼胎に金箔を被せたもので、長径3.1cm、短径2.9cm。  
断面は径0.7cmの円形のやや太めのもの(1・2)と径1.8cm、断面円形で径0.2cmの  
細めのもの(3)がある。

玉類については、第5表を参照して頂きたい。

銀製空玉は、大小2種類あるが、すべて小破片化しており個体数は不明であ  
る。

### 石室再利用時に伴う遺物(第26図)

石室再利用時に伴う遺物には、土師器・瓦器・鐵釘がある。



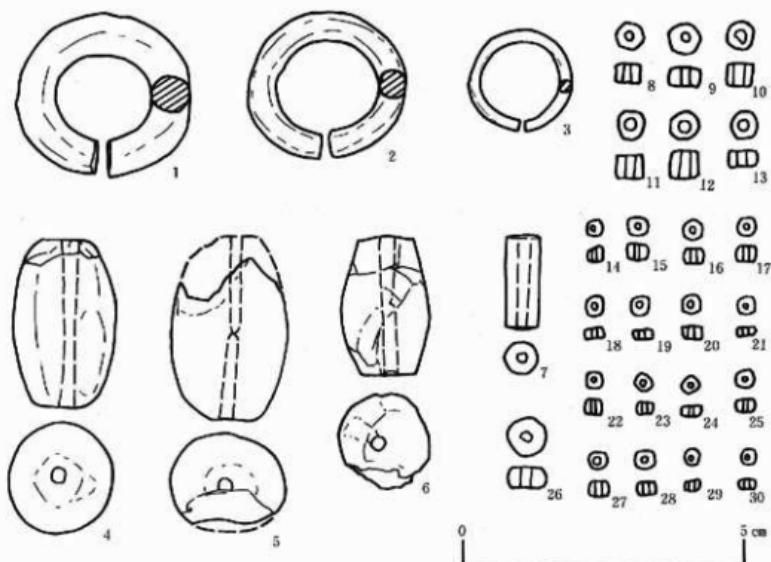
第24図  
大刀実測図

第5表 玉類一覧表

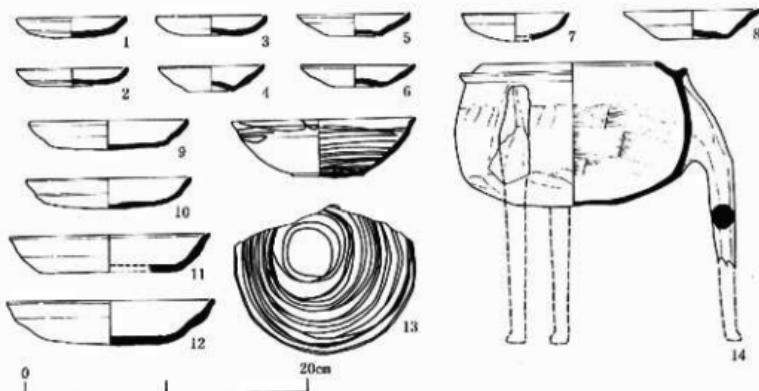
No	種類	材質	長(㎜)	巾(㎜)	孔径(㎜)	重量(g)	色	出土位置	備考
4	東玉	琥珀	30.0	19.0	3.0	3.0		C区床面	両面から穿孔
5	"	"	33.0	22.0	2.9	2.0		C区床面	"
6	"	"	25.0	16.0	2.2	4.7		不明	"
7	管玉	碧玉	17.0	6.0	2.9	1.0		C区床面	
8	白玉	滑石	3.9	4.8	1.5	0.2		C区床面	-
9	"	"	3.9	5.9	1.4	0.2		C区床面	
10	"	"	4.1	5.0	2.2	0.2		D区	
11	"	"	4.1	4.9	1.9	0.2		C区床面	
12	"	"	5.1	5.0	2.8	0.3		D区床面	
13	"	"	3.0	5.0	1.9	0.2		D区床面	
14	小玉	ガラス	2.8	3.1	1.0	0.1	青	C区床面	
15	"	"	3.0	4.0	1.0	0.1	黄	不明	
16	"	"	3.0	4.0	1.0	0.1	黄	A区床面	
17	"	"	3.0	3.9	1.0	0.1	青	A区床面	
18	"	"	2.0	4.0	1.0	0.1	黄	C区床面	
19	"	"	1.9	4.0	1.1	0.1	黄	C区床面	
20	"	"	2.0	4.0	1.1	0.1	青	C区床面	
21	"	"	1.9	4.0	1.1	0.1	綠	C区床面	
22	"	"	2.9	3.0	0.9	0.1	青	C区床面	
23	"	"	2.4	3.0	1.0	0.1	青	C区床面	
24	"	"	2.0	3.9	0.9	0.1	青	C区床面	
25	"	"	2.7	4.0	0.9	0.1	綠	C区床面	
26	"	"	4.0	7.2	2.0	0.3	青	C区床面	
27	"	"	3.0	4.0	1.2	0.1	黄	C区床面	
28	"	"	2.5	3.8	1.1	0.1	黄	C区床面	
29	"	"	1.6	3.0	0.9	0.1	綠	C区床面	
30	"	"	2.0	3.1	0.9	0.1	黄	C区床面	

土師器は、皿に限定でき、法量的にみて小皿(1~8)・中皿(9~10)・大皿(11~12)に分類できる。小皿には、底面が広い平坦面をもつもの(1~3)と大きく凹んだもの(4~8)がある。

瓦器には、楕1、三足鍋1がある。楕(13)は、口径13.2cm・器高4cmを測る。口縁部は、やや外反し、端部内面に沈線を巡らす。口縁部から底部にかけて丸味をもつ。底部には、断面三角形を呈する低い高台を貼付ける。外面には、口縁部のみに粗雑な暗文を施す。内面は間隔の広い暗文を加え、見込みには同心円状の暗文を施す。三足鍋(14)は、口縁部が短く内傾し、端部を四角くおさめる。口縁部直下には、斜上方に短くのびる鉤をつける。体部は張りをもたず、平底の底部につづく。体部内面中央には、横方向のハケメ調整を加える。体部外側全体に煤の付着が認められる。鉄釘(第23図5)は、断面正方形を呈する太い棒の先端を尖がらせ、頭部を直角に折り曲げたものである。全長9.3cm、厚み1.3cm、頭部の長さ3.3cmを測る。(中西)



第25図 床面出土装身具



第26図 石室再利用時の遺物

## 6.まとめ

1. 本墳の築造時期は、出土遺物より6世紀中～後半と考えられる。
2. 出土遺物については、大きく分けて2型式あり、第1・2群がTK10型式にほぼ該当し、第3群は、これよりも若干新しい様相をもつものを含み、前述した出土状況から考えて、棺台を使用した追葬時の副葬品と混じっているものと考えられる。第4群については、他群と位置が全く異っており、須恵器を含まない追葬時の副葬品とも考えられる。
3. 人骨は、頭骨が2体分出土したが、他の骨では一部3体分と考えられる部分も出土しており、今後、詳細な検討が必要であろう。
4. 主体部については、遺物の出土状況、棺台から2体ないし3体が考えられる。第1主体は、第1群～第3群間に石室主軸と平行にあると考えられる。棺台は追葬時のものと考えられ、5列の石材が置かれている。全てを1体の追葬時のものと考えれば、長さ約2.5mとなり、市内の山畠古墳群の調査例から妥当な大きさである。しかしながら、前述したように、5列の棺台下部の敷石の有無を考えれば、第1・3列間で1体、第2・4・5列間で1体となり、それぞれ、約1.4mと2.1mを測る。遺物の形式差、出土位置を考え合せ、棺台を使用した追葬2回の可能性が高いと考えたい。

(上野、中西)

- (1) 昭和60年10月28日より、(財)東大阪市文化財協会により共同住宅建設に先立つ発掘調査が実施されている。
- (2) 才原金弘・上野利明『馬場遺跡・鬼塚遺跡・出雲井古墳群発掘調査概要』東大阪市埋蔵文化財発掘調査  
概要25 東大阪市教育委員会 1984
- (3) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

## 第4章 桜井1号墳発掘調査

### 1. 古墳の位置と調査の経過

今回報告する桜井1号墳は、生駒山地の西麓、東大阪市六万寺町1丁目956番地に所在する。古墳は、岩滝山のふもとに形成された扇状地の中央付近、南側を西流する小谷川(大門川支流)を望む標高約42mの所に位置している。周辺山麓には、扇状地形中央部～山腹にかけて大小群集墳が形成されており、中でも本古墳の北東山麓部には、出雲井・客坊山・山畠・花草山・五里山古墳群など數十基からなる群集墳が分布している。

本古墳の東～東南部、上六万寺町から市城南端の横小路町にかけた山麓部には、古墳の群集は顕著でなく、本古墳の東方に長大な横穴式石室を有する「本松古墳」他数基が点在し、また南側横小路集落の北～東側に群集墳として把えられる二ヶ所の群集がみられる。

本古墳は、こうした群集に包括されるものでない可能性があり、旧六万寺村集落、別名“桜井村”と呼ばれた集落の東端に位置し、本古墳の北側隣接地に存在し、既に破壊された小古墳の存在と合わせ、製造時期、規模等その性格を異にした1つの小群集を形成していたことが考えられる。本古墳の名称は、こうしたことからも新しく命名したものである。

本古墳は、昭和60年6月17日、土地所有者の磯山博美氏が同氏宅庭の廃材を埋め込む作業にあたり、石室の石組と組み合わせ石棺を偶然に発見されたもので、文化財課ではその連絡を受け、現場を確認したが、石室の前半は南側隣家へ続いている状況であったため、とりあえず発見個所を中心に石室内の状況について緊急調査することとし、調査は7月15日～20日までの間に実施した。



第27図 桜井1号墳の位置と周辺の道路

## 2. 調査の概要

古墳発見の際、石室中央が床面まで掘られ、組み合わせ石棺の南端の棺材が掘り上げられており、石棺中央上部に落下した天井石が棺の南半を押しつぶした状況であることを確認した。このため、石室内に合わせ南北3.4mの範囲について調査を行った。(第29図)

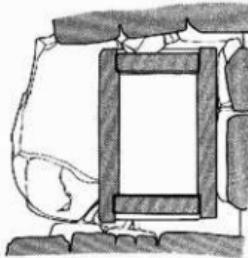
この結果、小規模狭長と考えられる横穴式石室は、周辺水田化の際に上部が破壊されたもので、遺存した2つの天井石は、この時動かされ、石室下方へ落し込まれた状況にあった。

石室内は、当時に完全に盗掘を受け、石棺東南隅で唯一検出した須恵器杯身以外、石室床面・石棺内とも副葬品が残されていなかった。石室内埋土中に若干時期の古い形象埴輪片が含まれていたがこれらは、古墳築造時の周辺よりの混入とみられる。(第31図)

### (1) 横穴式石室

石室の前半は確認できなかったが、石室は、奥壁巾1.05m、確認した長さ約3.3mを測り、調査した範囲では袖の存在は確認できない。平面プランとして狭長な石室であることも考えられるため袖の存在も全く捨て切れない。石室主軸は、

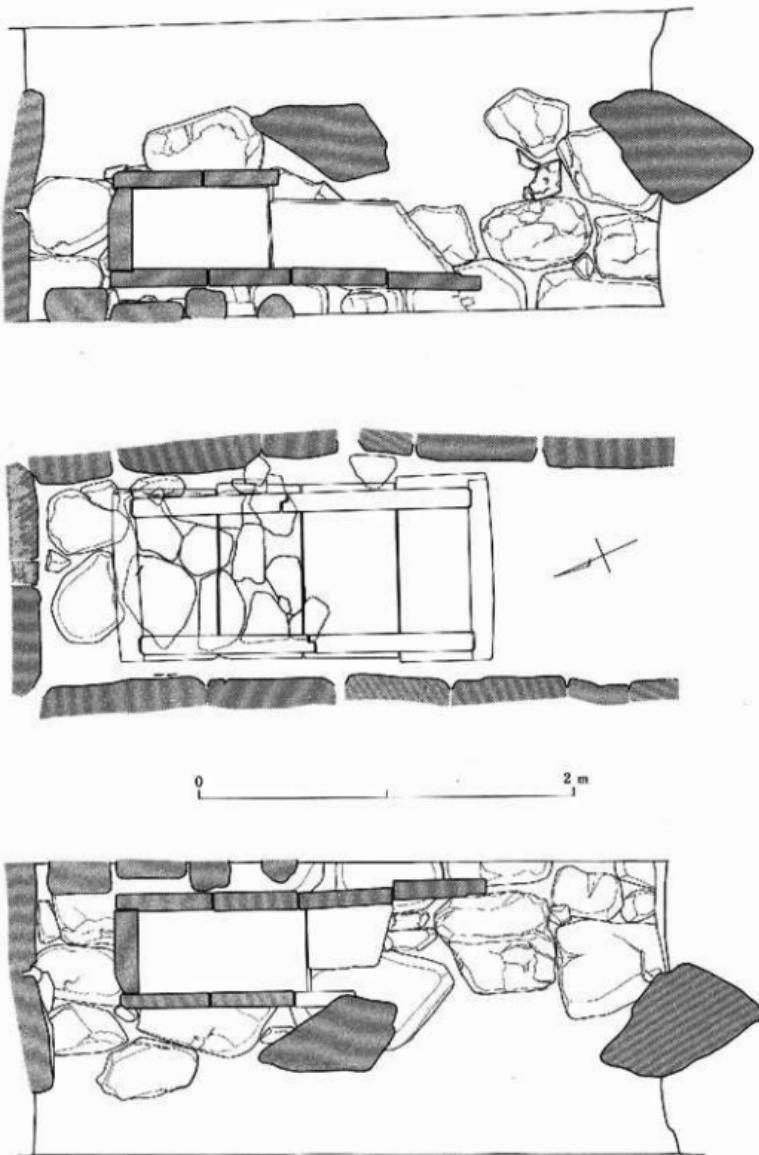
S-25°-Wを測り、東壁ラインはわずかにふくれている。石材はすべて花崗岩を使用し、比較的小型の石材で構築している。両側壁は、一部3段目の石材を残し、奥壁部の高さと考え合わせて、床面敷石より約1.1mを測る石室高を持つものであったと考えられる。このため、石室内の空間は極めて狭く、石棺蓋材と天井石の空間は、わずか50cmとなり、もはや石室の規模・構築は内部に納められ、組み立てられる石棺自体を最小限の空間に納めることを強く意識して行われたと考えられる。



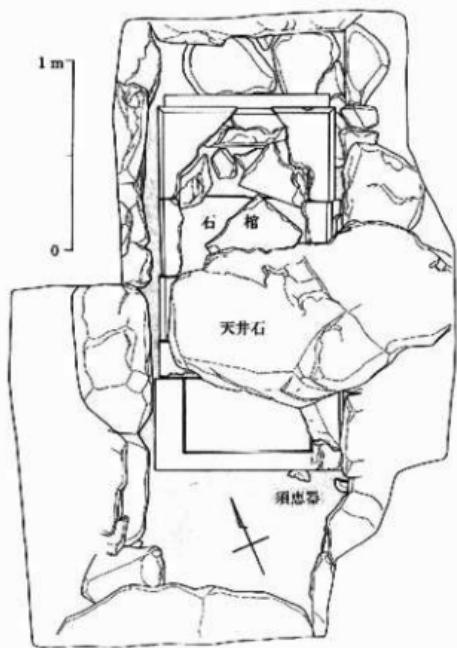
### (2) 石棺と敷石

石室奥部に遺存した石棺は、凝灰岩製組合式箱形石棺で、厚さ約10cmを測る底板4、両側板4(2+2)、小口板2、蓋板4の計14枚の加工石材で組み立てられたものである。蓋板の中央及び南半、両側板の南側は割っていたが、棺長2.0m、同巾185cm、高さ65cmを測り、棺内部は、長さ175cm、巾65cm、高さ42cmを測る。棺は、奥壁部より40cmをあけ、両側壁いっぱいに組み立てられている。棺各材の寸法は次のとおりである。

棺蓋板(北より)	1 長さ48cm、巾94cm	側板(東)	北 長さ83cm、巾45cm
	2 " 40cm、巾(")		南 " (100cm)、巾(")
	3 " (48cm)、巾(")	側板(西)	北 長さ93cm、巾45cm
	4 " (50cm)、巾(")		南 " (88cm)、巾45cm
棺小口板	北 長さ88cm、巾45cm	底板(北より)	1 長さ55cm、巾91cm
	南 不明		2 " 45cm、巾93cm



第28図 石室及び組合式石棺実測図(1/30) 石棺平面図は一部復原



第29図 石室と石棺検出状況

下には、50cm~20cm大のやや大きな石を混える敷石が施されているが、石棺奥半部にしかなく、一部の石が直接石棺を支えてはいるが、ほとんどは直接支えず、敷石上面の凹凸部に砂質土が敷かれ、棺台とした上に設置されたものと考えられる。敷石が棺全体に及ばないことは、單に手を抜いたとは考え難い。なお、棺下、敷石上及び西側壁に接し鉄製品3点を検出した。これら遺物は、副葬品でなく、石棺組み立て時に使用された工具とみられる。

### 3. 遺物（第30図）

今回の調査により検出した遺物としては、石棺南端東壁近くで出土した副葬品の須恵器杯蓋の他石棺下敷石上で検出した鉄製工具片3点のみである。

須恵器杯蓋 口径11.3cm、高さ3.5cmを測る小型の杯蓋(1)である。蓋底部は径5cmほどの平坦面をのこし、成形台からの切り離し面を粗くのこしたままである。青灰色を呈し焼成・胎土とも良好である。

鉄製品(2)は両端を欠き、長さ4.7cmを測る不整形で裏面に皺折痕を残す。下部に残る木目痕から柄の着装が考えられる。上部は片刃状につくっている。(3)は下端を欠損しているが、長さ11cmを測る鉄錐様のものであるが先端は錐に近い形とみられる。(4)は鉄釘状のもので、断面は方

3 長さ50cm、巾93cm

4 " 50cm、巾100cm

棺の構造で注意されるのは、底板周囲に溝ではなく、段を付け側板をのせている。側板は溝を切った小口にはめられている。側板は、両面とも加工がよく、東西交互に長短の石材を用いている。小口板材外面は上半を大きく面取りし、下部を胴ぶくれに厚くしている。蓋材は四周立材に単にのせるだけでなく、裏面を一段深く削り、立材外側へはめ込んでいるなどが挙げられる。底板は他にもみられるように必ずしも長方形ではなく、寸法も不揃いである。特に注意されることは、大半が上山産の同質凝灰岩であるのに対し、最も奥の底板は全く異なり、やや厚い竜山石製のものと考えられる。また、石材が石室内で組み立てられる際、東側壁と側板との間に頗るに近い自然石をつめ、立材の支えとしている。石棺の

下には、50cm~20cm大のやや大きな石を混える敷石が施されているが、石棺奥半部にしかなく、

形に近い長さ7.6cm、下半に木目痕を残している。(2)・(3)は共に石棺細部組み立ての際の調整工具として使用されたものと判断される。

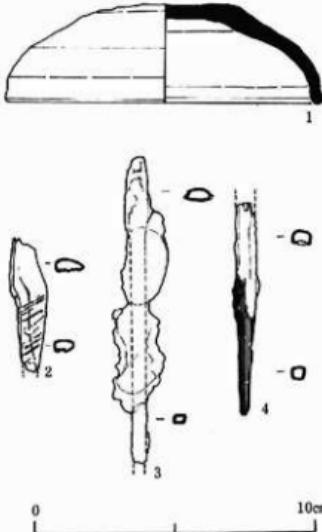
#### 4.まとめ

今回の調査は、南側晴家下へ続く石室前半部については調査できなかったため、本古墳の全容をつかむことはできなかった。また、石室内及び石棺についても既に盗掘を受け、副葬品のはほとんどが持ち去られていたが、知られたことについて若干まとめてみたい。

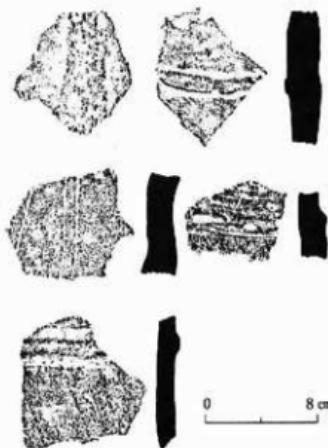
本古墳の名称は、今回新たに付けたものであり、これは周辺の群集墳とくに本古墳の東側山麓部に分布し、長大な横穴式石室を有する二本松古墳を中心とする群集（上六万寺古墳群としておく）とは谷川をへだてて小群集を構成した内の一基と考えたためである。本古墳の横穴式石室は既に記したように極めて狭小なもので、石室奥半部の石室巾わずか1.1mの間に、石室空間を埋めるようにして凝灰岩製組合式箱形石棺を納めていた。石室巾を見ても本石室は周辺地域で最も狭小な石室であり、石室内部の空間の広さに対する意識が相当薄れた段階に入っていると判断される。石棺の組み立てが石室構築と並行かあるいは構築後かの問題が生じるが、恐らく構築後埋葬直前に組み立てられ、石棺前方の小口・蓋石の間隔により納棺されたものであろう。

石室の前半はどういった平面形態か不明であるが本調査部分では袖の存在はなく無袖式の狭長な石室へ移行した段階のものと考えられ、このことは、さらに石室前半部での追葬の可能性も残している。

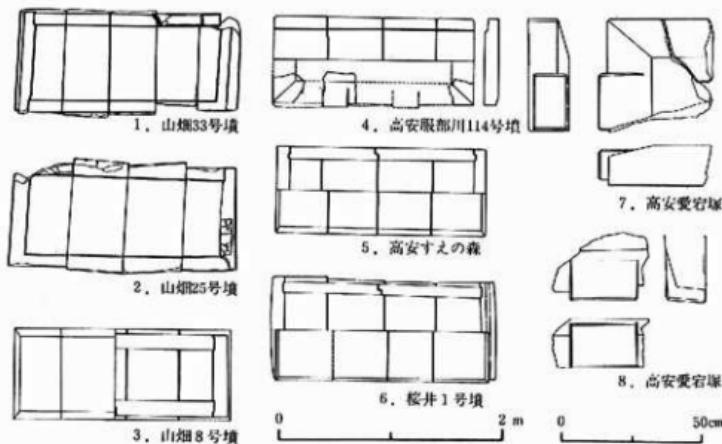
石室内に納められていた組合式石棺自体は、生駒山地西麓に、ごく一般的に見られるものであるが、本古墳の石棺は比較的の遺存状況がよく、その構造・時期を考える上で良好な資料といえる。周辺でこれまで知られる組合式石棺は、底板4枚・両側板各2枚・小口板2枚・蓋板4枚の計14枚で構成されるのが一般的である。市内山畠33号墳の石棺例のように



第30図 頸忠器・鉄製品(1/2)



第31図 墓輪拓影(1/4)



第32図 組合式石棺

底板に5枚を使用したものもみられるが概して棺長約190—200cm、棺巾約80cm、高さ約70cm前後を測るものが多い。さらに蓋板・小口板・側板は、組み合わせ上あるいは外観上各材の大小はあっても比較的正しく長方形に整形されたものが多いが底板は不揃いの長方形の石材を合わせせるものがほとんどである。本古墳の石棺の底板も両端の不揃いの4枚から成り、側板を受ける部分は段状に施されている。これは、同じく山畠25号墳第4次埋葬（狭道入口部）の石棺と同じであり、これに対し、山畠8・33号墳の石棺では溝状に四方を加工している。溝状の加工のものは、段状加工のものに先行すると考えられる。また、組み合わせのための溝や段等の細部加工は、板状原材の在地への搬入後にされたことも充分考えられるところである。

さらに、本石棺の蓋は上面の端をわずかに面取りしている程度で、全体として箱形化したものであるが、山畠8号墳等やや時期の遅る石棺については、組合式といえども棺蓋は屋根形に作られ、棺自体が家形の意識と伝統を受けたものであることを示すものがあり、在地組合式石棺自体の変遷とその背景をうかがうことができる。

こうしたことを考え合わせ、本古墳は、石室の構造あるいは組合式石棺の変遷の中でも後出のもので、石棺前端より出土した須恵器杯蓋の形式もふまえ、少くとも6世紀後半～末にかけた周辺群集墳の盛期より遅れた7世紀に入って新たに築造の契機を得た古墳の一つといえよう。

第6表 石棺一覧表

(巾)は側板巾

No	古墳名	所在地	石材	形	寸法( )は内寸(cm)			材数	備考
					長さ	巾	高さ		
1	山畠33号墳	東大阪市上四条町 (山畠古墳群)	凝灰岩(白色)	組合式	200 (164)	89 (62)	不明	底板5、小口 1、側板1の 一部のこる	横穴式石室(両 袖、玄室前半に 平行の形)
2	山畠25号墳	" < " >	" { }	"	203 (171)	90 (70)	不明	底板4のみ	横穴式石室(左 片袖、狭道入口 部に平行の形)
3	山畠8号墳	" < " >	" { }	"	188 (169)	80 (44)	70 (48)	底板4、側板 4、小口2、 蓋板4	不明
4	服部川114号墳	八尾市服部川 (高安古墳群)	" { }	組合式箱形 (突起右)	178 (約158)	78 (57)	不明	底板4 蓋板他	横穴式石室(左 片袖、奥壁に並 行)
5	すえの森古墳	八尾市大槻 (高安古墳群)	" { }	組合式箱形	186 (163)	78 (57)	72 (47)	底板4、側板 4、小口2、 蓋板4	横穴式石室、詳 細不明
6	桜井1号墳	東大阪市六万寺町	凝灰岩(白石) 竜山石	"	200 (175)	85 (65)	66 (42)	底板4、側板 4、小口2、 蓋板(4)	横穴式石室、無 袖、石室奥部 底板の最奥の石 材は竜山石
7	愛宕塚古墳	八尾市持立 (高安古墳群)	凝灰岩(白石)	不明・家型 (突起右)	突起部幅10.5、横20			蓋板	横穴式石室(両 袖)、石室内石棺 片散乱、狭道部 中央より検出
8	愛宕塚古墳	" < " >	"	" { }	突起部幅13.6、横22.5			蓋板	7と同一個体

参考1)『枚岡市史』第三巻資料編(一) 枚岡市役所 1966

2)『山畠古墳群1』東大阪市教育委員会 1973

3) 1) と同七

4)『古墳1』東大阪市立日新高校地歴部 昭和39年3月より作図

5)「特耕清原得総氏所蔵の考古資料目録」『大阪文化誌』第二巻第二号 財团法人大阪文化財センター 1976

## 第5章 船山遺跡第1次発掘調査

### 1. 遺跡の概要

船山遺跡は、前章に報告した桜井1号墳の西方約450m、旧六万寺村集落（別名桜井村）の西端に鎮座する式内社の梶無神社を中心に約100m四方に広がると考えられる古墳時代～中世にかけての遺跡で、周辺地は、東大阪市六万寺町3丁目にあたる。遺跡の発見は、昭和45年頃で、同社周辺の宅地開発が進められた際、多くの土師器・須恵器片等が採集されたことによる。

梶無神社は、前述のとおり、「延喜式」神名帳にのせられた河内郡十座の一社で、その祭神、創建年月は不詳であるが、古くは船山明神と呼ばれ、旧桜井村集落の西端地に位置し、字船山と呼ばれるこの地へ西方より遷座された神社であったと伝えている。船山遺跡の名称は、字名をとったものである。周辺は、標高約19～22mを測る扇状地上に位置し、北は長門川、南は大門川と呼ばれる両谷川筋にはさまれる高所に立地している。

今回の調査は、小規模な調査にとどまつたが、本遺跡の調査としては、発見以来初めての発掘調査となつた。

昭和60年1月31日、梶無神社入口のすぐ南側にあたる六万寺町3丁目629-4番地において、住宅建設の届出があったが、文化財課では、届出者の協力のもとに試掘調査を行つた結果、比較的多くの土器片を含む遺物包含層が存在していることが判明し、届出者と協議の上、4月11日より約85m<sup>2</sup>の敷地内に長さ7.6m、幅4.8～2.0mのトレンチを設定し、発掘調査を進めることとした。



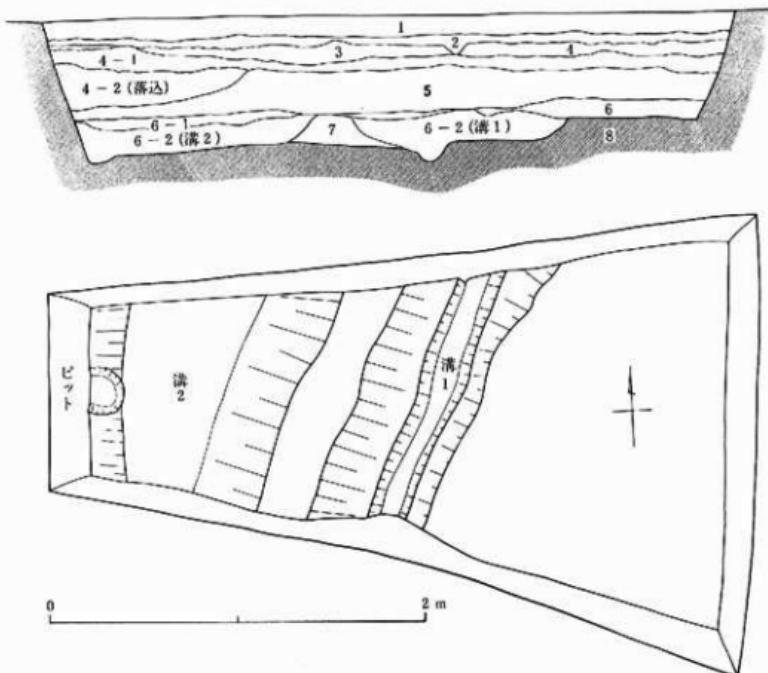
第33図 船山道路と調査地点

## 2. 層位

調査地における層位は第34図のとおりで、上層より

- 第1層………盛土
- 第2層………(臼耕上) 淡灰緑色砂質土
- 第3層………赤茶褐色小礫混砂質土
- 第4層………茶褐色礫混砂質土
- 第5層………暗茶褐色砂質土～同色粘質土 (下半)
- 第6-1層……暗褐色砂層
- 第6-2層……暗褐色砂質シルト (溝1、溝2内)
- 第7層………黄褐色粘土 (地山=第9層) のブロック土
- 第8層………黄褐色粘土 (地山)

となっている。この中で、第3～4層中には、須恵器・土師器・瓦器・陶磁器片が各々小量含まれていたが、各面での遺構は検出できなかった。下部の第5層上半は、細礫が多く、同様の



第34図 造構平面図及び層断面図

遺物細片が多かったが、下半層はやや粘質で、各種土器片も大きく、鉄製品片も含まれていた。この第5層以上の層は、第6層以下とは異なり、各々古墳時代～中世の土器片が含まれていて、水平に近い層となっていることを考え合せ、第5層下半は少くとも13世紀代の整地層であり、さらに上層はそれ以降の同様整地層と考えられる。第6層は、土師器・須恵器片を比較的多く含み、下部第8層地山面で検出した後述の溝1・2の埋没面上面をおおう薄い層であるが、中世の整地時に相当削平されたことも考えられる。第6-2層は、前記地山層から掘られた両溝の埋上層であり、第7層は、溝の掘削時に施された置土とみられる。

### 3. 遺構

今回の調査により検出した遺構は次のとおりである。

第6層上面…………ビット1

第8層地山上面……溝状遺構1、2

トレンチ西端で検出したビット1は、径約50cm、深さ約50cmを測るもので、少くとも13世紀末以前のものである。第8層地山面で、北東～南西方に並行する形で検出した溝は、ともに遺物から6世紀後半頃の

もので、東側の溝1は、

幅2.3m、深さ約20cmの底

部をさらに幅40cm、深さ

約20cm程に2段に掘られ

た溝である。西側の溝2

は、その西肩を検出して

いないが、検出幅約2.5m

を測り、西端ではさらに

深くなっている所から相

第35図 繩文土器片拓影(1/2)

当幅広の溝又は落ち込みと考えられる。なお、両溝を区切る幅約60cmの堤状部分は、地山土他のブロック土であり、両溝がほぼ同時期のものであると考えられるため、溝の掘られた時の残土又は人為的な盛土とみられる。

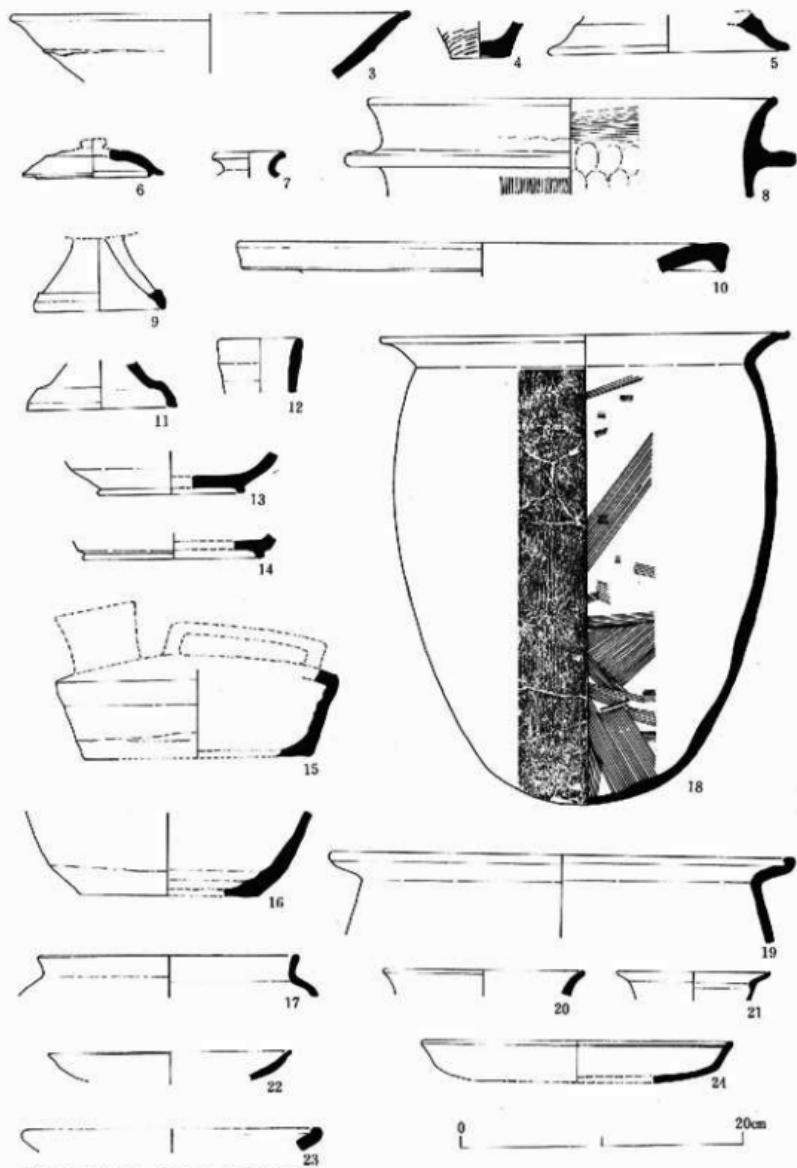
### 4. 遺物

今回の調査により、各層より出土した土器は、一部をのぞいてほとんどが細片の形で出土した。中でも5層下半を中心比較的多くの瓦器片・須恵器片・土師器片・弥生土器片他が含まれていたが、ほとんどが接合不可能な状態であった。以下、出土土器について簡単に説明する。

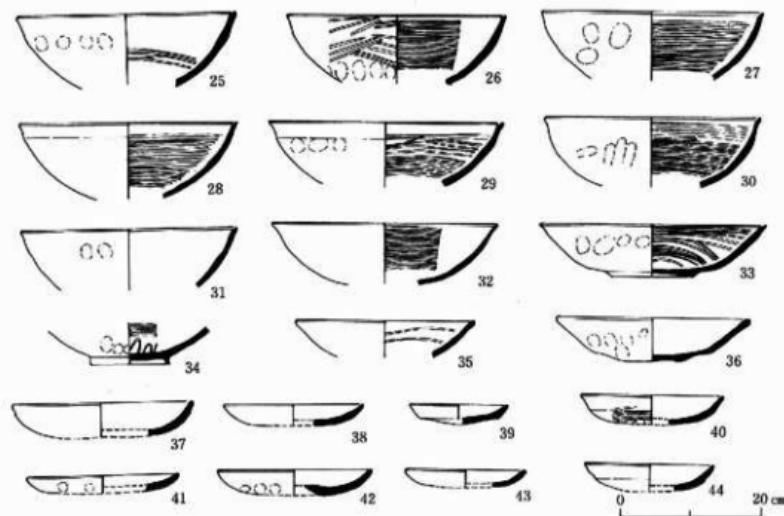
繩文土器片 6～7層中に混入していた小片として(1)は、ゆるやかに外反肥厚する口縁部の破片で、外面に縦方向の細い沈線を施している。(2)は、比較的肥厚させた口縁外面に繩文を施した縦帶文土器片とみられ、ともに後期前半以前のものと考えられる(第36図)。

弥生土器片 5層下半～6層中にやや磨滅した状態で若干含まれていた。器種として、高杯、壺、壺片等があり、すべて後期のものである(第36図3～5)。





第36圖 幼生土器・須恵器・土師器片(1/4)



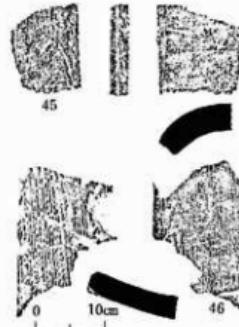
第37図 瓦器及び土師質土器(1/4)

須恵器 5～6層から出土したものとして、壺・高杯・杯・平瓶・蓋等の各片がある。時期的には、6世紀後半頃と7～8世紀頃に分かれるようである(6、7、9～17)。

土師器 須恵器片より出土量は少ない。図示しえなかつたが、カマド片の他、羽釜・甕・小型壺・皿のほか、土師質土器として中小の皿がある(18～24、37～44)。また、唯一元位置を保って出土した土器として(18)の甕があり、これは6層上面において横位に上半を削られる形で出土した。この甕は、口径29.2cm、高さ33.5cm、胴径27cmを測る。

瓦器 5層下半より比較的多く出土したが、復原できるものはほとんどない。器種として椀・皿がある。椀は人和型が主体で、口径約15cm～16cm前後のもので、外面は指押え痕、内面は横位ヘラミガキ、口縁部内側に細い沈線を施しているものが多い(25～34)、高台の退化した後出の椀(35、36)の他、皿(40)があるが、量は少ない。

出土遺物からみれば、本遺跡は、古墳時代後期～奈良時代、および鎌倉時代を中心に近辺に相当遺構が広がっているものとみられる。



第38図 瓦拓影(1/4)

## 第6章 神並遺跡第7次発掘調査

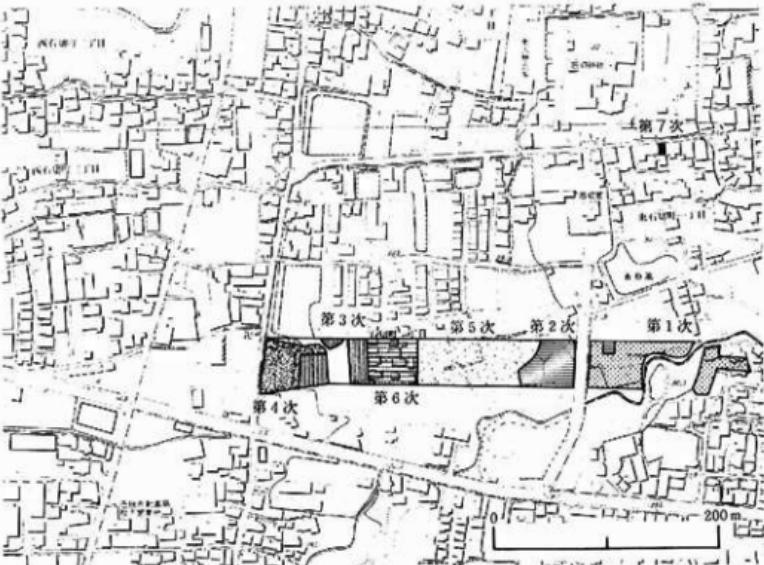
### 1. 遺跡の概要

神並遺跡は、東大阪市東石切町1丁目、西石切町1丁目に所在する縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡である。本遺跡は、大阪と奈良を結ぶ都市高速鉄道東大阪線の建設工事及び国道308号線の拡幅工事予定地内における試掘調査の結果、存在が確かめられた。昭和56年11月以降6次の調査が実施され、遺跡の範囲は東西約500m、南北約350mと推定されている。遺跡の立地は、生駒山西麓に発達する中位段丘上にあり、標高は20~45mである。

これまでの調査により遺跡の推移がおぼろげながら明らかになりつつある。遺跡の開始は縄文時代早期で標高30m付近で発見された。構造は、谷川に向ってなだらかに傾斜する一面に、こぶしだから人頭大の礫が密集した状態で検出された。礫群内より多量の土器・石器が出上しているところから、この礫群を中心にして居住施設があったものと考えられている。

出土物には、山形文・格子目文・ネガティブな楕円文様のある押型文上器、右舌尖頭器2点・石錐100点以上・石匙・スクレイバーなどの石器類、土偶2点などがあり、縄文時代の人々の暮らしを再現する上で貴重な資料となった。

弥生時代の構造は検出されていないが、弥生時代中期から古墳時代末に機能していた、東から西に流下する自然河川がみつかっている。自然河川は、緩いV字形を呈し、幅は約10mであ



第39図 調査地点位置図 (1/5000)

る。ここから弥生時代中期後半～後期初頭の壺・甕・鉢・高杯・蓋・ミニチュア土器が出上している。土器のほとんどは、自然河川の南斜面から底にかけて堆積していて、北斜面からは出土していないことから、自然河川の南側に集落があり、そこで使用された土器が落ち込んだものと推測されている。

古墳時代の遺構は、5世紀後半から始まりそれ以前については未検出である。5世紀後半から木になると、2つの自然河川にはさまれた平坦な段丘上に集落が形成される。遺構には、掘立柱建物・製鉄関連遺構・導水施設・溝・土坑などがある。掘立柱建物は梁間2間桁行3間、梁間3間桁行5間の2棟が検出されている。柱の掘り方は一辺1m、深さ40cmあり、柱材の抜き取り痕から柱の太さは20～30cmと推定されている。製鉄関連遺構は、北東から南西に向って流れる自然河川の北側斜面で検出された。東西約9m、南北約2m以上の範囲内に5世紀後半から木の須恵器・土師器・製塙土器・石製勾玉・有孔円板とともにフイゴの羽口4点、鍛造過程で発生する鉄滓片、炉壁片が出土した。導水施設は、自然河川のほぼ中央で検出された。自然河川に並行して杭列を2列並べ、その間に長さ約2m、幅約0.4mの樋状木製品を組み合わせたもので、西方の西ノ辻遺跡で検出された石組と一連の遺構群を構成する。

奈良時代初頭には、遺跡の東方で墓城になった一時期があり、羽釜棺2基が検出されている。1基は羽釜に土師器の皿を、もう1基は土師器鉢を蓋にして水平に埋められていた。奈良後期になると、西方が居住区になったようで掘立柱建物2棟、土坑7基を検出している。平安時代前期になるとさらに西方に移動し、建物4棟、棚列、溝、土坑などを確認している。鎌倉時代から室町時代の遺構は、遺跡のほぼ中央付近で検出されている。建物跡4棟以上、井戸9基、土坑、溝などである。建物は掘立柱で柱穴は径約30cm、深さ30～50cm程度の小規模なものである。井戸は、径1～2m、深さ3m以上の素掘りのものがほとんどである。土坑の中には焼土、炭層、二次的に火を受けた土器が多く混入しているものがあり、集落が火災にあったのちに、焼土、炭を土坑内に埋め込んだものと考えられている。また、瓦器椀・皿・土師器皿・羽釜、陶器(常滑焼・備前焼)、磁器(青磁・白磁)、古銭、鉄製品など当時の生活をうかがうことができる多量の土器が出土している。

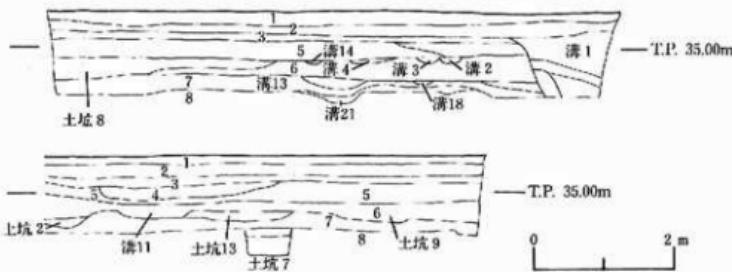
## 2. 層位

今回の調査地は遺跡の北端にあたり、北の音川と南の新川との間に派生する小尾根上、標高35m前後に位置する。近鉄奈良線石切駅から石切神社へ向かう参道筋に面しており、もともと木造の建物があったが、ほとんど破壊や擾乱はみられなかった。調査は約53m<sup>2</sup>について実施し耕土の関係で東西を2分して行なった。

調査地内の層序は、基本的に8層に区分することができる。

第1層 旧表土。現代層で既設の木造建築の基礎、コンクリート床などが残っていたため、機械で掘削し排除した。層厚13cm。

第2層 旧耕土。近現代層で木造建築ができる前の地表面で畑地であったと思われる。層厚16cm。



第40図 調査地西壁(上)と南壁(下)の層位

第3層 10YR 4 / 3に於ける黄褐色細緻混じりシルト(床上) 鉄分の沈着がみられ非常に堅密である。層厚13cm。瓦器、土師器、陶器、サヌカイト片が出土。第1造構面。

第4層 2.5Y 3 / 1 黒褐色疊混じりシルト 調査地中央やや東寄りに東西約2.2m、南北7mにわたって検出された。周辺で検出される地表面の土に似ていて、非常に堅くかつ疊を含んでいて客土された上と考えられる。層厚12cm。瓦器、土師器、須恵器が出土。

第5層 10YR 3 / 3 暗褐色シルト 南から北へゆるやかに傾斜する。層厚15cm。須恵器、土師器、瓦器、陶器が出土。

第6層 5Y 3 / 1 オリーブ黒色細緻混じりシルト わずかに南から北への傾斜が認められる。層厚22cm。土師器、須恵器、瓦器、磁器、陶器が出土。第2造構面。

第7層 10YR 2 / 2 黒褐色細緻混じりシルト 層厚10~20cm。土師器、須恵器、瓦器、磁器、石鐵、陶器、鉄釘、鐵錆が出土。第3造構面。

第8層 2.5Y 3 / 1 黒褐色疊混じりシルト 第4造構面。

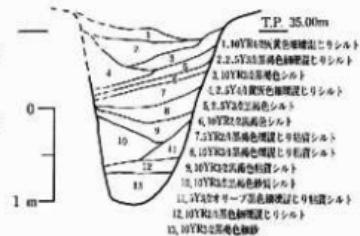
### 3. 造構

検出した造構は、第3層上面で溝1条、第6層上面で溝11条、土坑2基、第7層上面で溝5条、土坑7基、井戸1基、ピット6、第8層上面で溝1条、土坑4基、ピット14である。

### 第3層上面の造構

溝1 調査地北端で検出した東西方向の素掘りの溝である。幅は推定1.5m、深さ2.07mである。 第41図 溝1 東壁層位

溝内の堆積土は、上層が黒褐色シルトを中心とし、中層が黒褐色又は黒色疊混じりシルトを中心として、下層は黒褐色細砂で、上・中層はそれぞれ6層に細分することができる。遺物は5世紀後半の須恵器杯蓋をはじめとして、12~15世紀にいたる土師器皿、瓦器碗、青磁碗、15~16世紀の瓦器すり鉢・火鉢・羽釜、近世以降の陶磁器がある。遺物で一番多いのは14~15世紀にかけての土師器皿、13~14世紀の瓦器碗であるが、造構の掘削ベースとなっている第3層か



ら大正10年に鋳造された一銭銅貨が出上しているため、溝の開削はこれ以後のものである。したがって古代～近世までの遺物はすべて混入と考えられる。溝が掘られている場所が尾根筋から北へやや下がった所で、等高線に直交するような方向に延びていること、溝の規模などから考えて、農耕の用排水に使用するために掘削されたものと思われる。

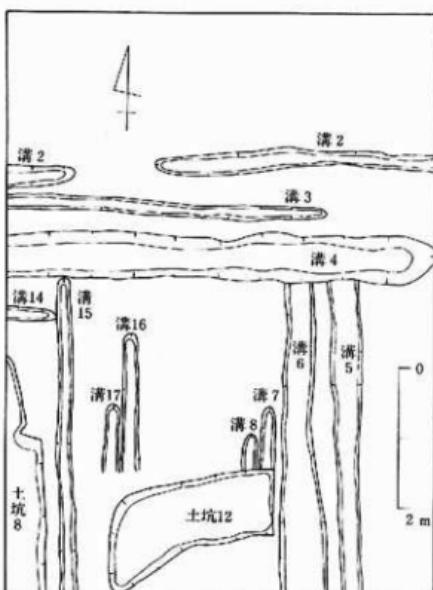
#### 第6層上面の遺構

溝2～4、14 調査地北半で検出した東西方向に平行する4条の溝である。すべて素掘りで溝2は幅23～30cm、深さ4～8cm、溝3は幅約20cm、深さ3～6cm、溝4は幅64～69cm、深さ5～13cm、溝14は幅約20cm、深さ2～3cmである。溝内の堆積土は、溝2が2.5Y 3/2 黒褐色細礫混ヒリシルト、溝3

が10Y R 3/2 黑褐色細礫混ヒリシルト、溝4が10Y R 2/1 黒色シルト、溝14が10Y R 2/2 黑褐色細礫混ヒリシルトである。出土遺物は、溝2が須恵器片、土師器皿、瓦器椀、すり鉢、縄文時代の石歯、溝3が須恵器、土師器皿、瓦器片、備前焼すり鉢片、溝4が須恵器片、土師器片、瓦器片、鉄滓である。

溝5～8、15～17 調査地南半で検出した南北方向に平行する7条の溝である。すべて素掘りで溝5は幅30～45cm、深さ3～6cm、溝6は幅38～68cm、深さ約5cm、溝7は幅約25cm、深さ2～3cm、溝8は幅20cm、深さ2～3cm、溝15は幅約18cm、深さ2cm、溝16は幅約22cm、深さ2cm、溝17は幅20～25cm、深さ1cmである。出土遺物は、溝5が須恵器、土師器皿、瓦器椀、瓦、溝6が須恵器、土師器皿、瓦器すり鉢、瓦器椀、溝8が土師器片、溝15が須恵器、土師器皿、瓦器椀、皿、溝16が須恵器、土師器、瓦器、鉄片である。遺物はいずれも細片であり年代の判別が非常に困難であるが、一番多くみられるのは12～13世紀の土師器皿、次いで13世紀代の瓦器椀、15～16世紀代の土師器皿である。これらの溝は、方位が東西方向と南北方向とに分かれているが、ほぼどちらも平行に走る溝であり水を流すといった機能ではないと思われる。溝の深さがあまりないこと、遺物がいづれも細片であることなどから、耕作痕（飼跡）ではないかと思われる。

土坑12 調査地南端で検出された不定形な土坑である。底は西端でT.P.34.77mで東端よりも



第42図 第6層上面の遺構

6cm低くなっている全体に西へ傾斜している。須恵器、土師器片が少量出土した。

土坑8 調査地西南端で検出された。大部分は調査地外のため規模などは不明である。須恵器片、土師器皿片、瓦器碗片、焼土、木炭等が出土している。

第6層上面の遺構の年代は、遺構から出土する遺物の一番新しいもので16世紀代である。遺構を形成している第6層中には、土師器皿、瓦器碗、皿、すり鉢、青磁碗、備前焼すり鉢、鉄滓、鉄片、磁器片、焼土塊などがあり一番新しいもので16世紀後半から17世紀代と思われる。この時期以降で、第5層が堆積した江戸中～後期以前のものと思われる。

#### 第7層上面の遺構

溝10 調査地南半で検出した。幅16cm、深さ3~6cm、ほぼ東西方向に延びる短かい溝で、溝11に西接し、焼土層の北辺に沿って走っている。溝内の堆積土は2.5Y3/1黒褐色シルトで、鉄釘が1点出土した。

溝11 南北方向に延びる溝で幅約1m、深さ9~12cm、検出長1.6mで調査地外へ延びている。溝のほぼ中央部に溝と同一方向に石列がみられる。石列の北端の石はすでに抜き取られていて存在しないが、上辺30cm、下辺54cm、高さ37cm、深さ2cmの台形状の抜き取り跡がある。堆積土は溝11と同じであるがやや粘質性をおびている。土師器、瓦器、須恵器、瓦の細片が少量出土した。時期は瓦器碗より13世紀後半から14世紀と思われる。

溝12 真南北方向の溝であるが調査地南東端付近で東に向きを変える。幅35~60cm、深さ20~39cm、底はゆるやかに北へ向って傾斜し低くなる。溝内の堆積は、底面にわずかばかり細砂層があり、ついで細礫をわずかに含んだ10YR2/1黒色砂質シルトがほとんどを占める。出土する遺物は土師器皿を主として瓦器碗、須恵器のいずれも細片である。瓦器碗は13世紀代であるが、土師器皿は14世紀代である。

溝13 調査地ほぼ中央部で検出した。真東西方向の溝で幅約90cm、深さ9cm、西にゆるやかに傾斜する。古墳時代から奈良時代にかけての須恵器片、土師器皿、羽釜を主体としているが中世の瓦器、土師器も含んでいる。溝が埋った時期は瓦器碗、土師器皿より13世紀中葉と思われる。

溝18 溝13の約1.3m北側で検出した。溝13とほぼ平行に真東西方向に延びる溝で、幅25cm、

深さ5~7cm、西にゆるやかに傾斜する。堆積土は10YR2/1黒色細礫混じりシルトで、須恵器、土師器、瓦器の細片を含む。埋没した時期は瓦器椀より13世紀中葉と思われる。

井戸1 調査地北東で検出した。長径3.3m、短径3m、南北にやや長い楕円形の井戸である。井戸南西の肩部でこぶし大の石がみられたが他にはみられず、また内部にも石がみられないことから石組の井戸ではなく素掘りのものと思われる。埋上は地山に非常によく似た2.5Y3/1黒褐色、10YR2/1黒色のシルトで壁上等が混っていた。出土遺物は須恵器、土師器皿・羽釜、瓦器椀・羽釜、瓦で、瓦器椀より13世紀後半から14世紀に埋められたものと思われる。

上坑1 溝12の堆積土を除去して検出した。長径95cm、短径推定70cm、深さ24cm、底面標高34.5mである。堆積土は上下2層に区分でき上層が10YR2/1黒色シルト、下層が10YR3/1黒褐色細礫混じりシルトで溝12に類似しているが、溝12の方が砂質分が多い。須恵器、土師器、瓦器が出土した。時期は瓦器椀から13世紀後半から14世紀代と思われる。

土坑2 南東端で1/4を検出した。直径は推定1.45m、深さ17cmである。これも土坑1と同じく溝12を掘削して検出したものである。堆積土は5Y3/1オリーブ黒色細砂で、須恵器、土師器の細片が少量出土した。時期は不明。

上坑13 東西幅1.4m、検出長1.4~1.5mで南側へさらに伸びている。深さ14cm。シルト質の細かい灰が堆積したもので、直径1~5cmの焼土塊、須恵器、瓦器、土師器、炭化木が出土した。時期は不明。

上坑3、4 土坑13の堆積土を除去して検出した。土坑3は長径60cm、短径53cmの楕円形、深さ40cm。土坑4は一边50cmの不整方形、深さ20cm。堆積土は土坑3が上層10YR2/1黒色細礫混じりシルト、下層2.5Y3/1黒褐色細礫混じりシルト、土坑4が2.5Y3/1黒褐色細礫混じりシルトで土坑3の上層からは須恵器、土師器、瓦器、青磁、瓦が、下層からは瓦器、土師器片が、土坑4からは須恵器、土師器、瓦器が出土した。時期は瓦器椀より土坑3、4とも13世紀前半と思われる。

土坑9 1.7m×2.7mの隅丸長方形を呈する土坑である。深さ10~13cm。土坑南西の肩部上に唐錢1枚、北宋錢6枚、南宋錢1枚の計8枚が折り重なった状態で出土した。土坑内の堆積土は7.5YR4/2灰褐色シルトで、須恵器、土師器皿・羽釜、瓦器椀・羽釜・火舟、鉄釘、1~10cmの大焼土塊が多数出土した。瓦器椀、土師器皿より13世紀中葉から後葉に埋ったものと思われる。

上坑10 溝13が完全に埋った後に構築されたものである。直径104cm、深さ15cm、皿状を呈する。中央部には平らな面を上に向かって10~25cmの五角形、厚さ8cm、10cm×20cmの四角形、厚さ5cmの石を2個置いている。堆積土は7.5YR3/3暗褐色シルトで焼上・炭化物を少量含む。土師器、瓦器、須恵器、白磁、瓦が出土した。土師器より14世紀中葉に埋ったものと思われる。

ピット 6個を検出した。ピット1~3は南北に1.15m間隔に一直線に並ぶ。規模はピット1が長径38cm、短径27cm、深さ9cm、ピット2が長径41cm、短径28cm、深さ10cm、ピット3が長径34cm、短径24cm、深さ9cmである。堆積土はピット1が2.5YR3/2黒褐色シルト、ピット2、3が10YR2/2黒褐色シルトでいずれも炭化物を含んでいた。これらのピットからは須

恵器、土師器、瓦器の細片が出土したが時期を判明できる資料は出土しなかった。ただ、ピット1は溝13が埋まつた後に掘削されていることから、ピット1～3が同時に掘削されたものとすれば、13世紀中葉かそれ以降のものと思われる。ピット4は直径45cm、深さ20cm、ピット10は長径61cm、短径39cm、深さ6cm、ピット11は直径58cm、深さ5cmである。ピット4から瓦器碗、土師器片、焼上塊、炭化木片、ピット10から瓦器碗、土師器碗、土師器皿、須恵器片、ピット11から瓦器碗、土師器皿、須恵器片が出土した。ピット4は瓦器碗より12世紀後半に、ピット10は瓦器碗、土師器皿より12世紀後半から13世紀前半に、ピット11は瓦器碗、土師器皿より13世紀前半に埋ったものと思われる。

#### 第8層上面の遺構

溝21 東西方向に延びる溝である。幅87～112cm、深さ20～38cm、南側斜面や底は起伏がある。堆積土は、10Y R1.7/1 黒色細礫混じりシルトで須恵器短頸壺・杯蓋、土師器羽釜・杯・高杯などが出土した。出土遺物から8世紀後半に機能したものと思われる。

土坑5 溝19のすぐ南側にある土坑である。長径93cm、短径67cm、深さ9.7cm。堆積土は3層に分かれ、上層から10Y R2/1 黒色細礫混じりシルト、10Y R3/1 黑褐色粘質シルト、10Y R2/2 黑褐色粘質シルトで、土師器片とサカカイト片が出土した。

土坑6 土坑5の南約2.5m、調査地南端で検出した。112cm×93cm、深さ79cmの不定形な形をしている。堆積土は2層に分かれ、上層が10Y R2/3 黑褐色礫混じり粘質シルト、下層が10Y R2/1 黑褐色礫混じり粘質シルトで、土師器片が1片出土しただけである。

土坑7 土坑6の西約1.2mに位置する。東西幅約80cm、検出長67cmで調査地外に延びる。深さ47cm。土師器と瓦器の細片が出土した。瓦器片より13世紀代と思われる。

土坑11 調査地の南西端で一部を検出した。規模、平面形態は不明。土師器片が少量出土したが、時期は不明。

ピット 15個検出したが規則的な配置はみられない。ピット5～9は楕円形を呈し深さ21～56cm、土師器細片を少量出土したのみで時期不明。時期がある程度推定できたのは、ピット14、

15、17、19、21で、14は土師器、瓦器、炭化物が出土し、瓦器碗、土師器皿より13世紀前半に、15は土師器、瓦器、須恵器、瓦、焼上塊が出土し、瓦器碗より13世紀前半に、17は土師器、瓦器、須恵器が出土し、瓦器碗より13世紀前半から中葉に、19は土師器、須恵器が出土し土師器皿から13世紀中葉に、21は土師器、瓦器、須恵器が出土し13世紀前半に比定することができる。

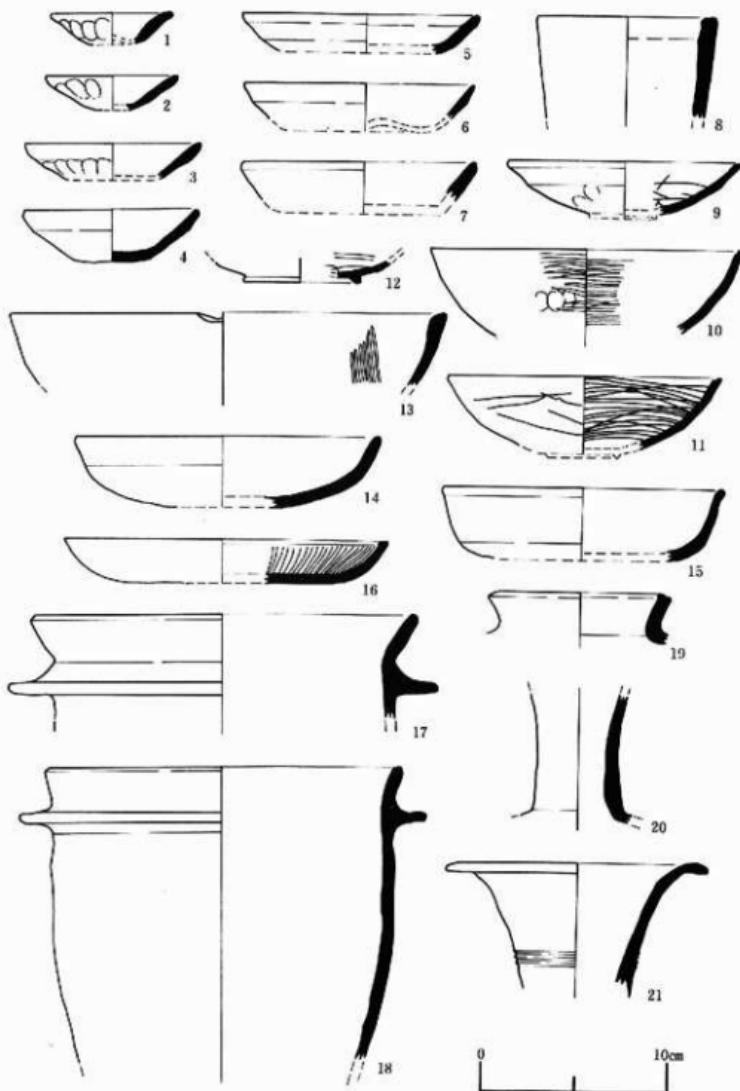
#### 4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦、焼土塊、鉄釘、鉄滓である。包含層からの出土量が多く、遺構からの出土量は少ない。また、遺構から出土したものも古い時期の遺物を多く含んでいて一括性に欠ける。出土遺物のはとんどが小破片である。ここでは遺構出土の遺物についてのみ記述する。

土師器 皿、壺、高杯、羽釜、把手、杯がある。皿は大きさの上で12cm前後の大、9cm前後のもの、7cm前後の小に分けられる。1は肉厚で外反ぎみに立ち上がる。口縁端部には凹線状のくぼみが、体部内面にはハケによる調整がみられる。2、3は体部が直線的に立ち上がり端部は尖りぎみにおわる。体部外面には指痕压痕が残る。5は体部が2段にヨコナデされている。14～16は奈良時代の杯・皿である。14は底部外面を削ることなく成形時の凹凸をそのまま残し、ヘラミガキは全く施していない。口縁部全体が内弯する弧を描き端部を丸く仕上げている。15は口縁下部が内弯し、上部がわずかに外弯する形態で、端部は丸くおさめる。16は底部内面にテセン暗文、口縁部内面に斜放射暗文を施す。羽釜は砲弾形の長い体部に「く」の字形に外反する口縁部をもつ。頸部にはほぼ水平方向にのびる幅の広い鈎をめぐらしている。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎上には多量の金雲母、角閃石、長石を含む。色調はにぶい黄褐色(10 YR 5/4)で生駒西麓の胎土である。

瓦器 碗、皿、すり鉢、香炉、羽釜、火鉢がある。8は直線的には垂直に近く立ち上がる体部をもつ香炉である。器壁は肉厚で口縁上端は平坦面を形成するが両端は丸みをもつ。体部下半には三脚を有するものと思われる。粘土紐の巻き上げ成形と思われ、接合部分に指押さえの痕がみられる。9～12は碗である。9のみが和泉型であとは大和型に属する。9は体部が内弯しながら立ち上がる。口縁部は強いヨコナデのため外反する。体部内面のミガキが3～4回の圓線と粗く、外面のヘラミガキは全くみられない。内底面に並行暗文がみられる。10、11は口縁端部内側に沈線がめぐる。体部外面のヘラミガキはジグザグに分割して磨く方法であるが11は磨きが粗雑である。12は内底面に一方向のナデをしたのち連結輪状の暗文を施す。13はすり鉢である。体部は内弯しながら立ち上がる。体部上半は分厚くなり、口縁部上端には内傾する面を形成する。内面に7条以上の櫛描きすり目を施す。胎土には0.1～2mm大の長石、石英を多く含む。

須恵器 杯、杯蓋、短頸壺、長頸壺、練鉢がある。19は口縁部が斜上にまっすぐのび、上端は外傾する面を形成する。口縁端部は内側に肥厚する。口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。20、21は長頸壺の口頸部である。ゆるやかに外反しながら立ち上がる頸部に屈曲して外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。頸部外面には2～3条の沈線による文様帶がみられ



溝1(1、9、10) 溝2(5) 溝4(2、8) 溝6(13) 溝12(11) 溝13(18) 溝16(7)

溝21(14~17、19~21) 上坑3(4) 上坑8(3、6、12)

第45圖 出土造物実測図(13、17、18(21/4))

る。体部との接合部分から口縁に向ってヨコナデ調整がされている。

### 5.まとめ

第7次調査では遺構面を4面検出した。第4遺構面では溝21から平城宮V-SK2113類似の遺物を出土しており、今回の調査地では8世紀後半が生活の開始とみられる。しかし、短期間のものであり13世紀前半まで遺構、遺物とも存在しない。8～9世紀代の遺構は3次～5次調査区で検出されており、集落の中心は南西300m付近にあったと思われる。13世紀前半の遺構は溝21と同一面で検出した。ピット、上坑等はあるが建物を想定することができなかった。

第3遺構面では13世紀中葉から15世紀にかけての遺構、遺物が稠密に分布する。これらのことから13世紀から15世紀まで継続して生活がなされていたことがわかる。ピット2～4には焼土塊、炭化木片が含まれていて付近の土も焼き締ったように非常に堅くなっていた。また、上坑9、10、13には特に焼土塊が多く含まれていて灰層と思われる7.5YR4/2灰褐色シルトが堆積し、炭化物も多く含んでいた。出土遺物から13世紀中葉から後半にかけての時期と思われ調査地南半付近で火災があったものと思われる。同様の事例は約200m南の1次調査区でも検出されており、大規模な火災があったことが推定される。勘解由小路権中納言藤原兼仲の日記『勘仲記』弘安5年(1282)8月8日の条に、石清水八幡神人らが関白兼平の門前に群参して、瓦木寄人の狼籍と下柳庄民吉弘男の事を要望した記事がある。玉柳庄民吉弘男の問題がどのようなものかはっきりしないが、神並庄や林燈油園が八幡宮領であるので、その間の争論が今回の結果を生じたことも考えられる。

16世紀以降についてはピット、井戸、上坑といった生活に結びつく明確な遺構はみられない。第6層上面では耕作痕と思われる跡を東西、南北に平行に検出したことから、少なくとも近世に入る段階において耕地化され、それが近代まで続いているものと思われる。

- (1) 下村晴文「神並遺跡出土の押型文土器」『(財)東大阪市文化財協会 記要I』 1985
- (2) (財)東大阪市文化財協会『歴史河内の歴史』 1984
- (3) 大阪府教育委員会『神並・西ノ庄・鬼虎川遺跡発掘調査概要』 1984
- (4) (5) (6) 前掲注(2)
- (7) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書』
- (8) 『枚岡市史』第三巻 史料編(一) 1966

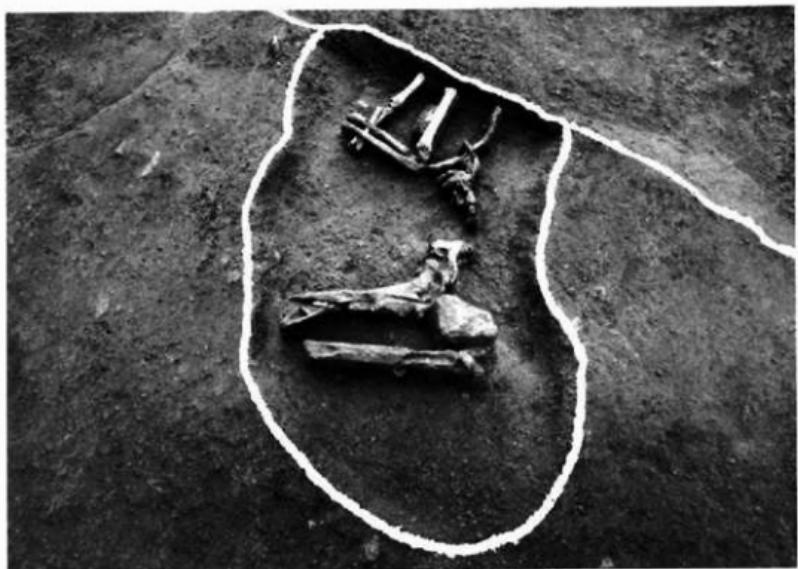
# 図版



1. 第9・10層上面検出遺構（東より）



2. 第9・10層上面検出遺構（南より）

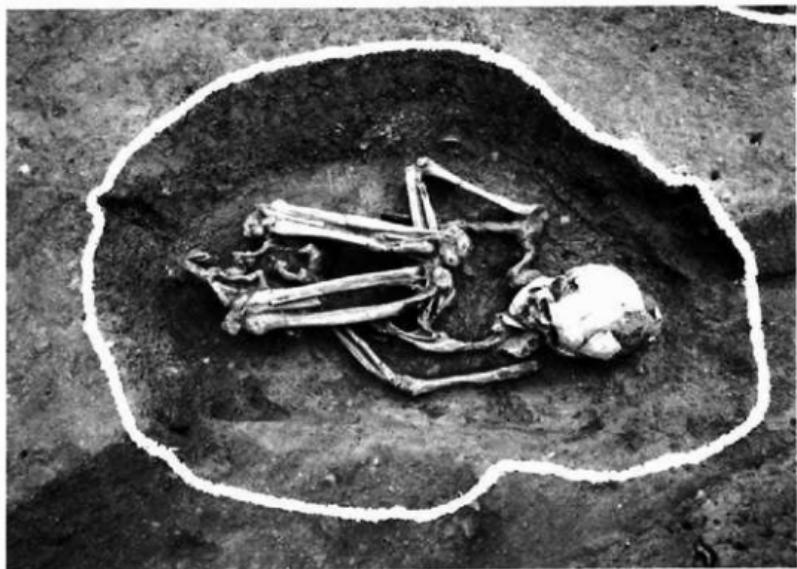


1. 土坡墓XII



2. 土坡墓III

圖版 3 日下遺跡第 13 次調查  
遺構

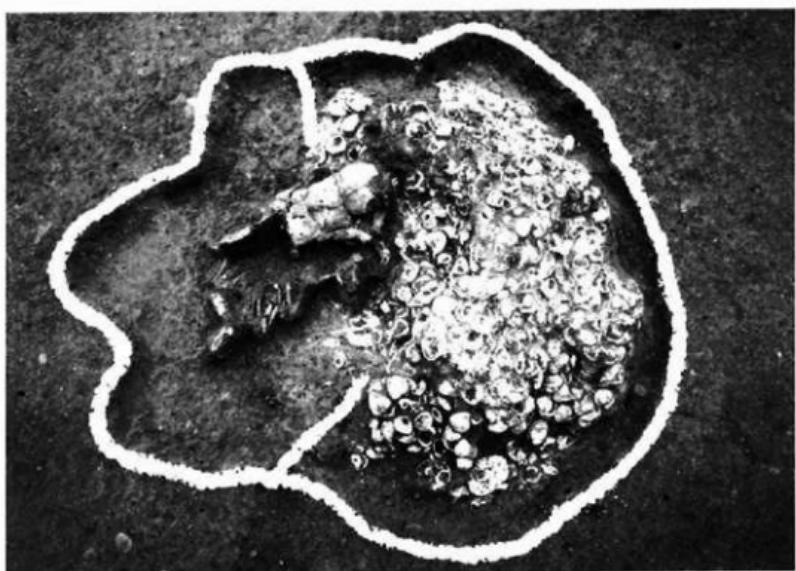


1. 土坡墓 XIII



2. 土坡墓 XIV

圖版4 日下道跡第13次調査 遺構



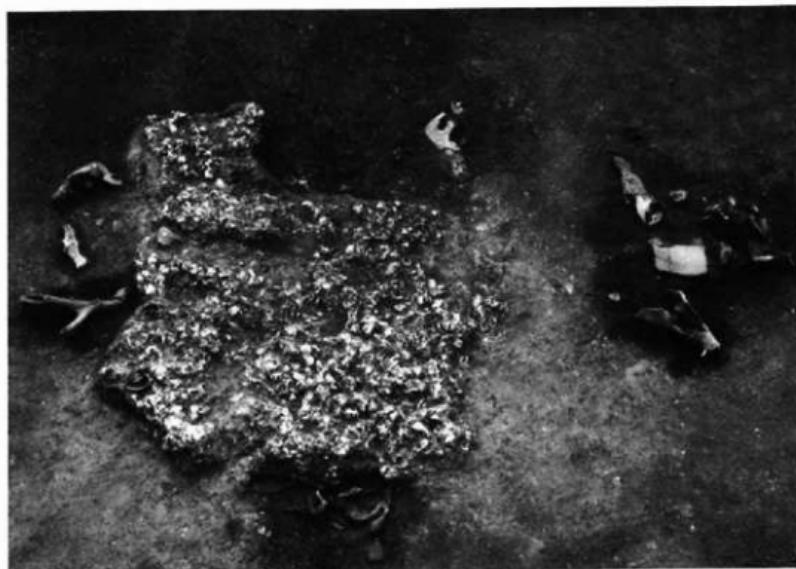
1. 土塚墓 XV・貝塚II



2. 土塚墓 XVI

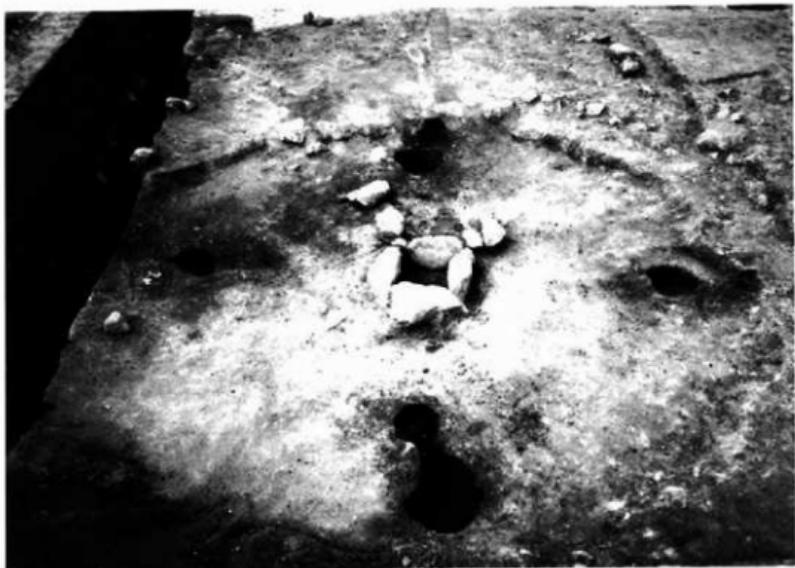


1. 土塙35 (犬埋葬)



2. 貝塙1

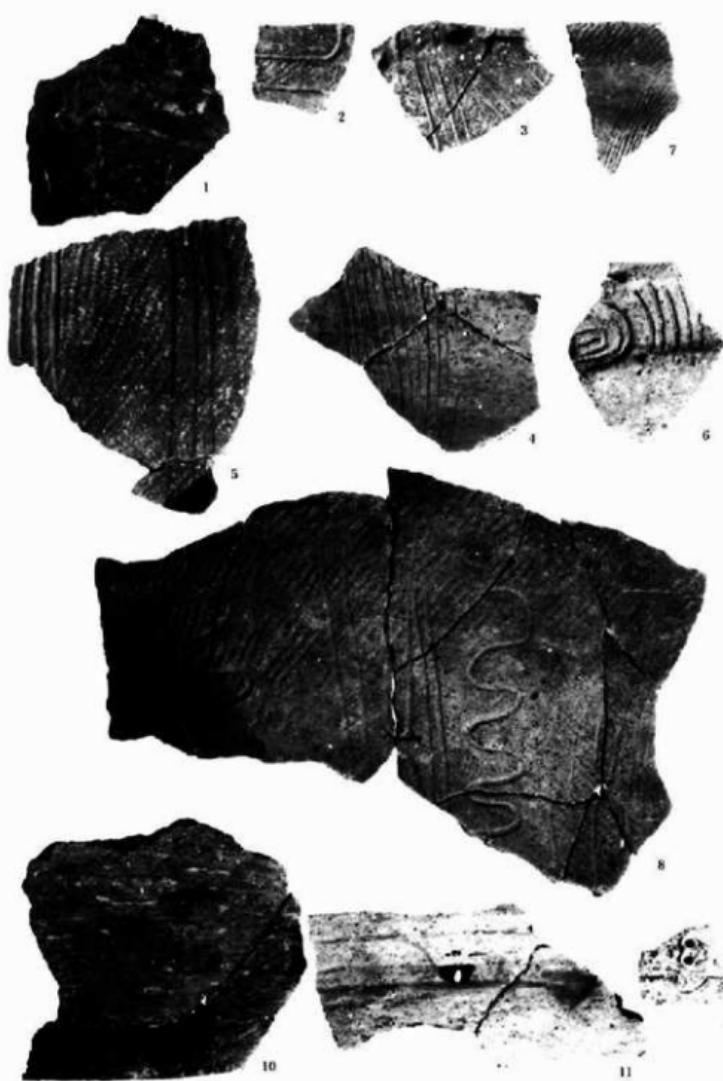
図版6 日下遺跡第13次調査 遺構



1. 住居跡（南より）

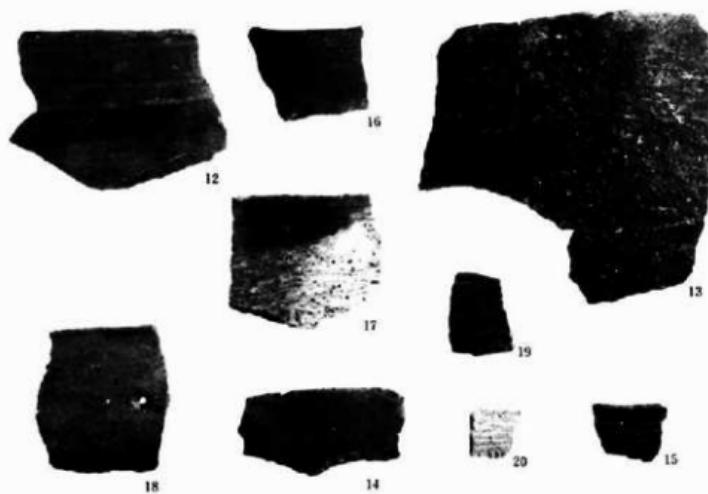


2. 方形石組炉<sup>1</sup>（東より）



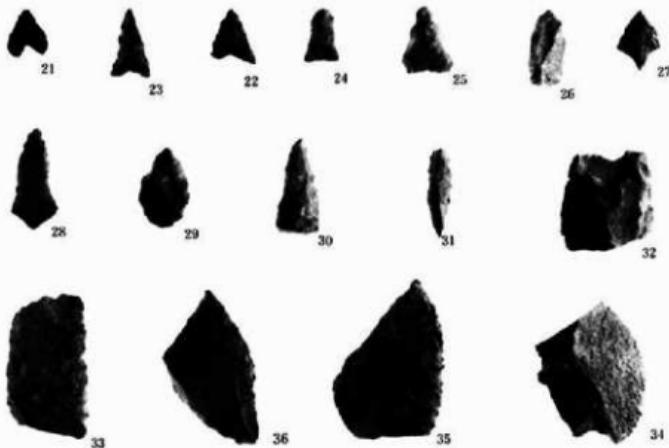
(1/3)

1. 抱文土器（後期）



(1/2)

1. 繩文土器（晚期）



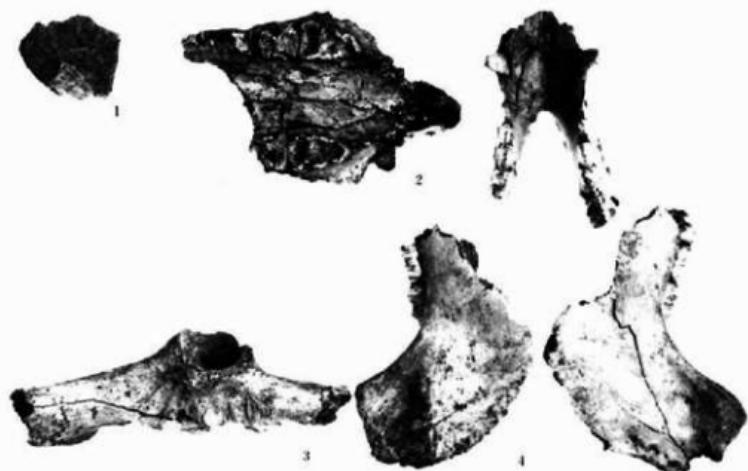
(1/2)

2. 石器



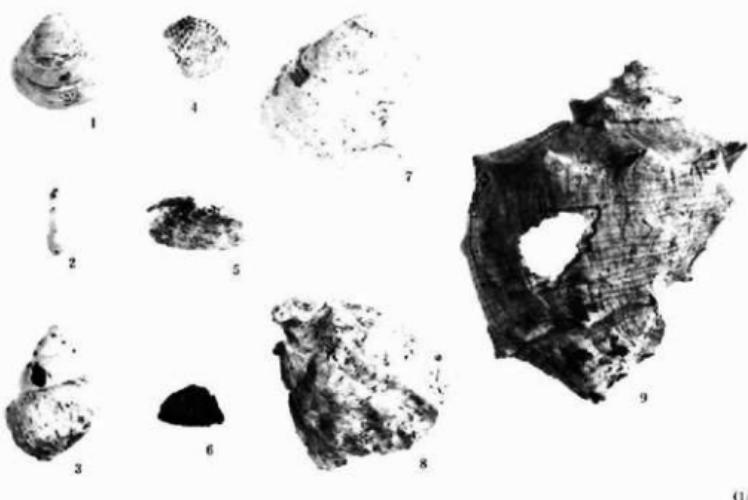
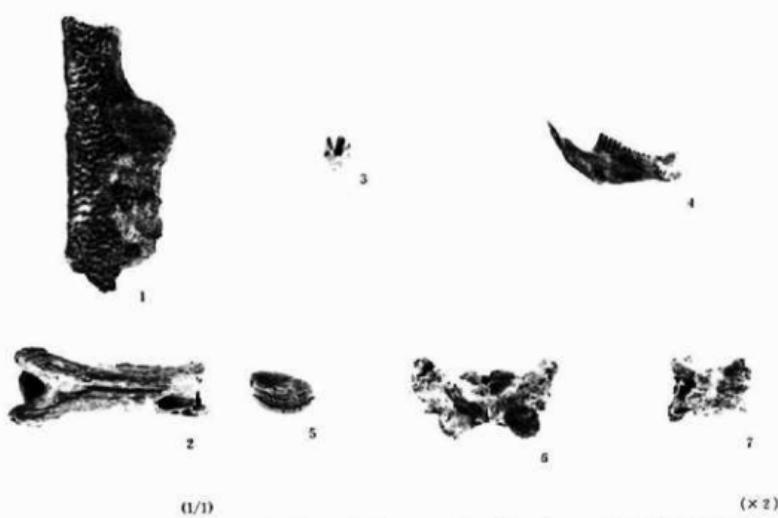
0/2

1. 鹿骨(シカ) 1.角 2.角 3.頭蓋骨 4.下顎骨



0/2

2. 鹿骨(イノシシ、クジラ) 1.クジラ椎体 2.イノシシ上顎骨 3.イノシシ寛骨 4.イノシシ下顎骨



2. 貝 1. セタシジミ 2. クロダカワニナ 3. マルタニシ 4. マツカサガイ 5. イシガイ  
6. サルボウ系の貝 7. ハマグリ 8. カキ 9. アカニシ



1. 調査前の状況



2. 石室全景



1. 石室全景



2. 石室左側壁



1. 石室右側壁・棺台



2. 石室床面遺物出土状況



1. 石室床面遺物出土状況（第1群）



2. 石室床面遺物出土状況（第2・3群）



1. 石室床面遺物出土状況（第4群）



2. 石室再利用時遺物出土状況



3



4



5

6



7



8

圖版 17 出雲井 7 号墳調査 遺物



5



7



9



8



10



15



16



17



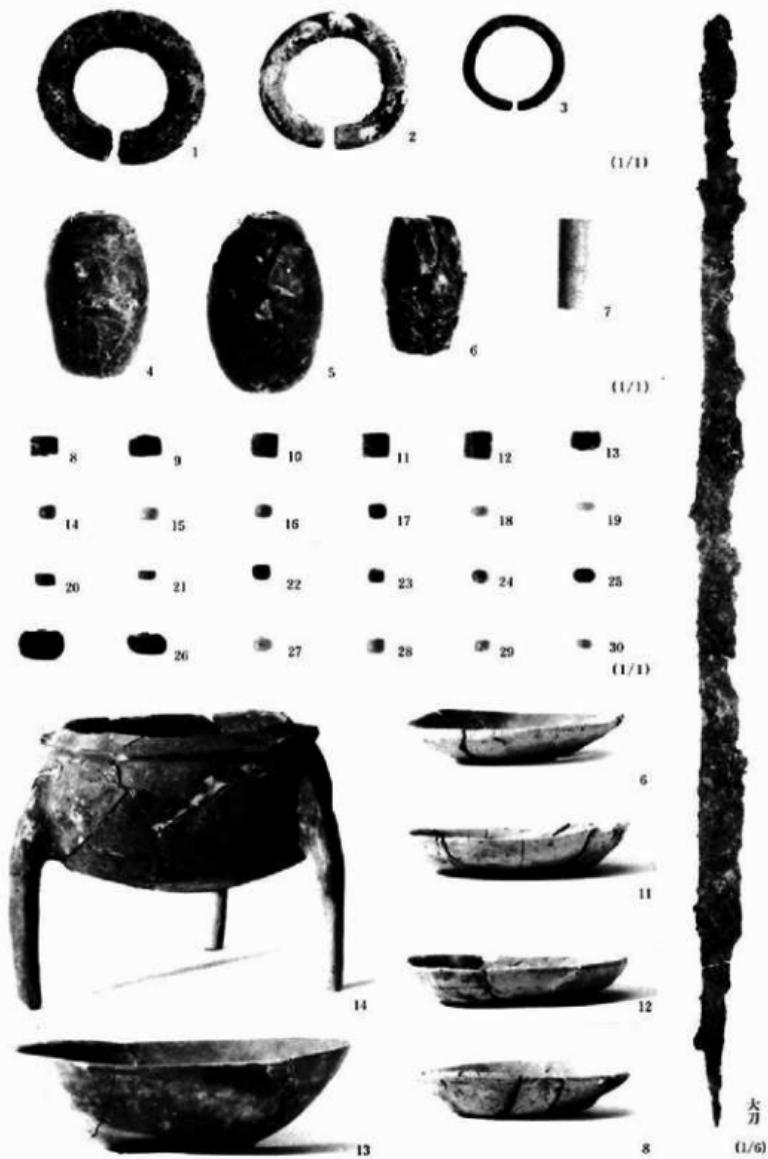
18



19



(9/10)





1. 古墳全景（南より）



2. 古墳全景（東より）



1. 石室内の組合式石棺蓋遺存状況



2. 組合式石棺奥半部組合状況



1. 石棺南端部須恵器出土状況



2. 石棺下の棺台の状況



1. 石棺下における鉄製品出土状況（矢印は鉄製品）



2. 出土遺物



1. 調査地全景（東より）



2. 第6層上面遺物出土状況



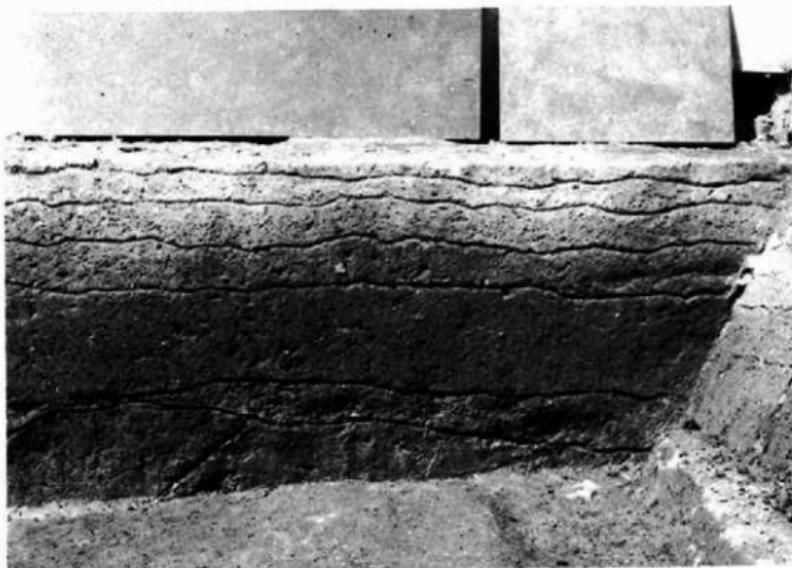
1. 土師器甕出土狀況



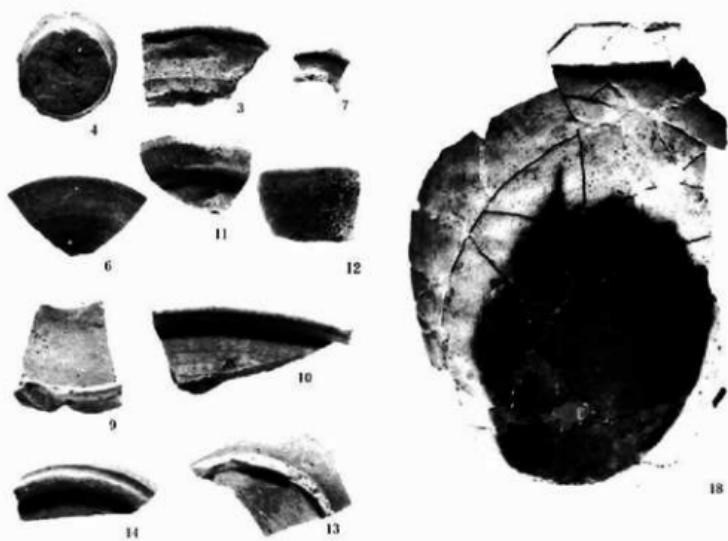
2. 溝檢出土狀況



1. 溝 1 の検出状況

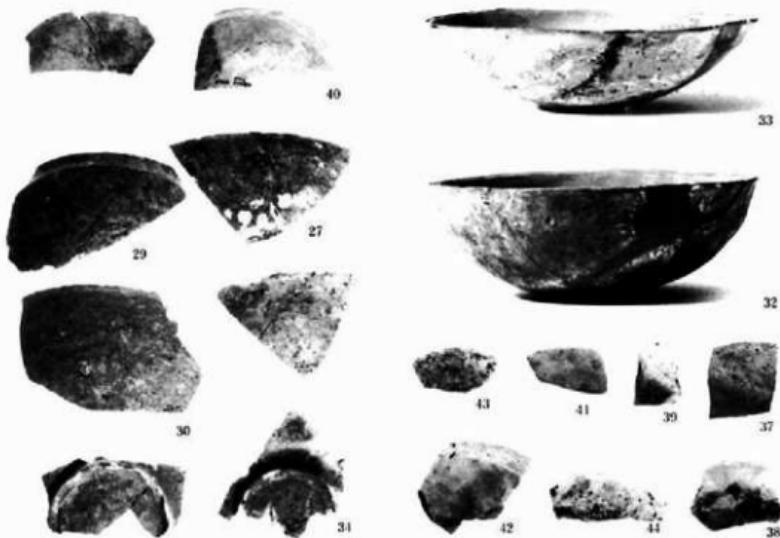


2. 調査地の船位



1. 弥生土器・須恵器

2. 土師器（器）



3. 瓦器梶・土師器片



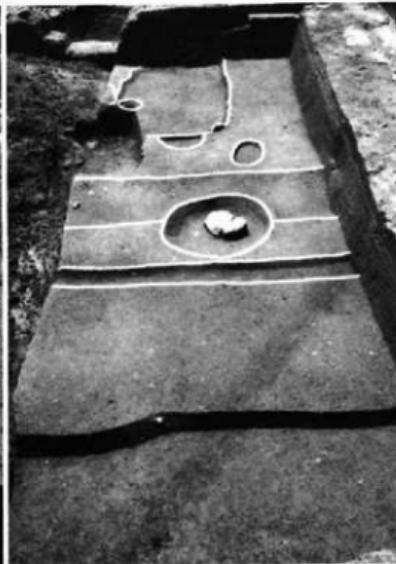
1. 第6層上面検出遺構(東)



2. 第6層上面検出遺構(西)



3. 第7層上面検出遺構(東)



4. 第7層上面検出遺構(西)



1. 井戸 1



2. 第 8 層上面検出遺構 (西)



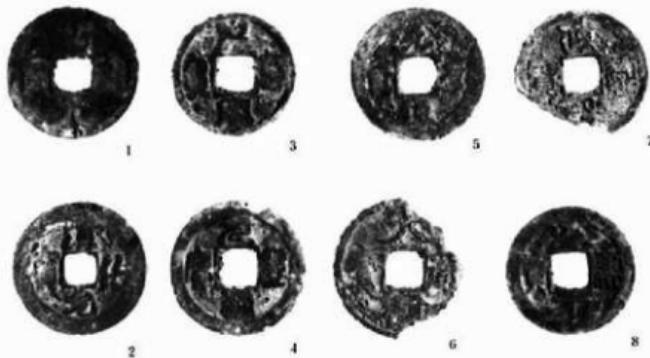
3. 第 8 層上面検出遺構 (東)



1. 溝21遺物出土状況



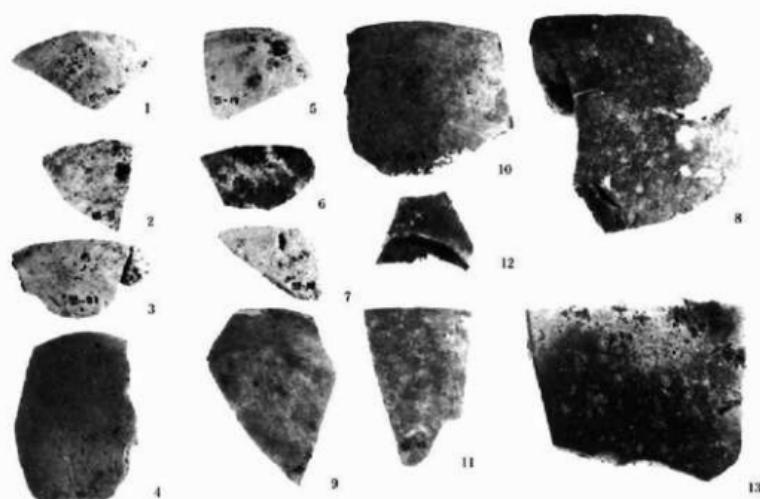
2. 土坑9 貨錢出土状況



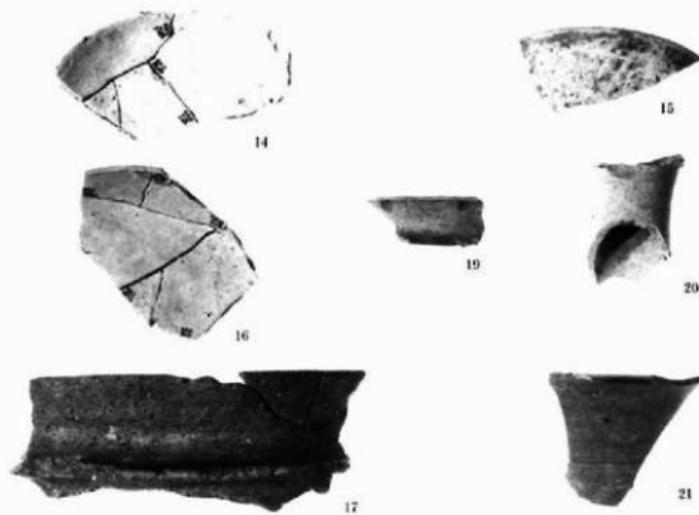
(1/1)

- 1.開元通寶(621年) 3.皇宋通寶(1039年) 5.元豐通寶(1078年) 7.政和通寶(1111年)  
2.淳化元宝(990年) 4.元豐通寶(1078年) 6.大觀通寶(1107年) 8.淳熙元宝(1174年)

3. 土坑9出土貨錢



1. 溝1・2・4・6・12・16、土坑3・8出土の遺物



2. 溝21出土遺物

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要27  
東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要  
- 1985年度 -

昭和61年3月31日  
発行 東大阪市教育委員会  
印刷 ドウミ印刷広研社